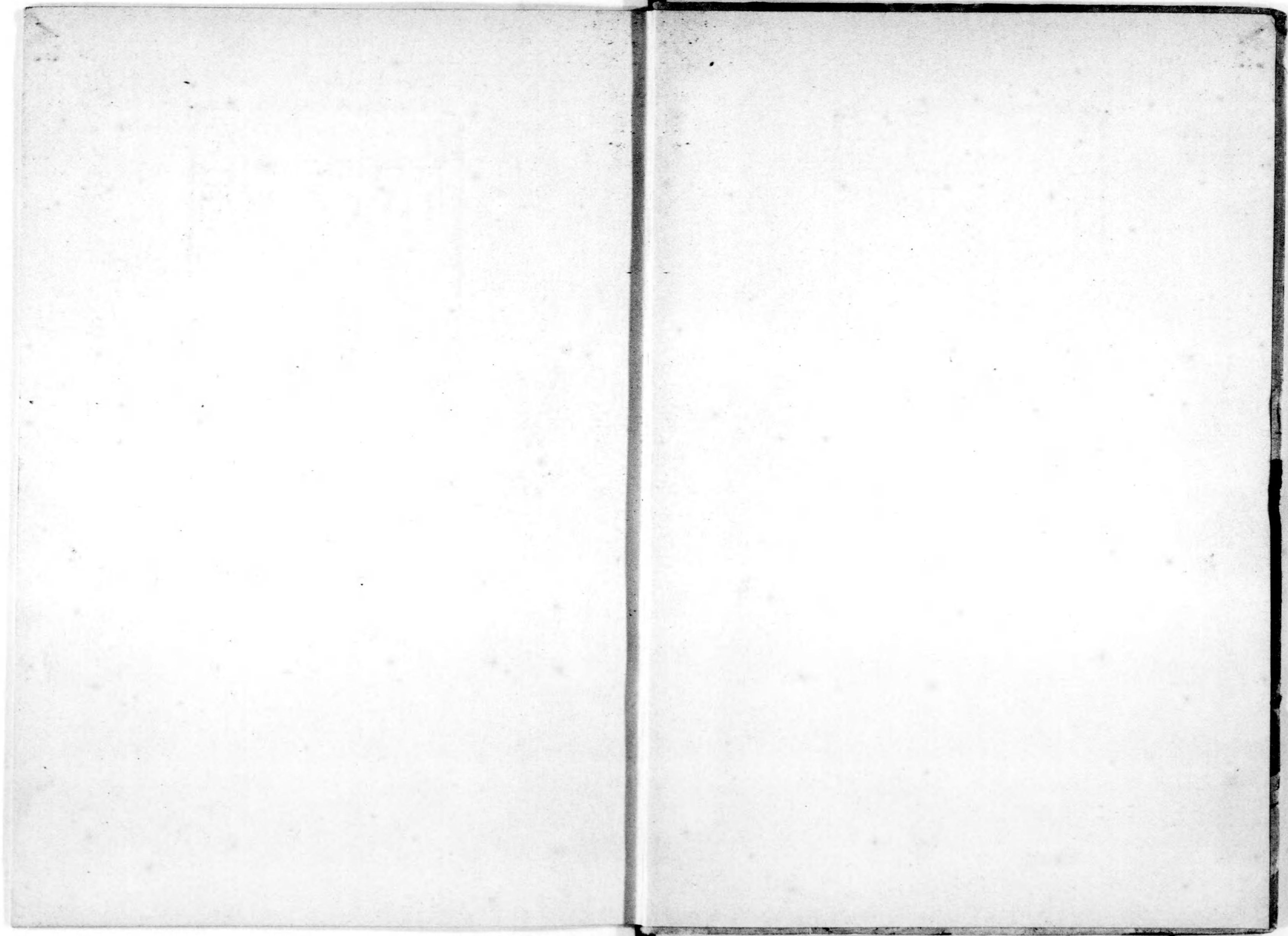




0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始





持100
323



葛城太夫



近
松
秋
江

大正
5. 7. 21
内交

しとくといつまでも降りつゞいてゐた春雨がやんで薄墨色の雲が散らけて
 ゆくと眞蒼に洗ひ出された空から瑠璃のやうに艶やかな日の光が嫩い芽の萌え
 であ前栽の木々を蒸すやうに照らして黒く濡れた土地から湯氣のやうないきれ
 が濃く立ち騰つてゐる。

陰氣に濕つてゐた部屋のうちが俄に明るくなつて來たのに氣がついて、今ま
 で一生懸命に針の手を運ばしてゐた姉のおそのは、がくりと折れまがつたやう
 になつてゐた首をふつともたげてこの女のよくする癖の、白い額に伶俐さうに
 描かれた眉根のあたりに深い皺を刻むやうな眼をして明るい日光の映る障子の
 方を眺めた。

『あゝお天氣になりまつせ。一ぺんあこ明けまへうか、あんだ寒いことおへん

やろ。』

彼女はさういつて傍の病床に横つてゐる弟の方を見た。

また少し熱が出てきたやうで、さつきから頭を枕にうづめて微睡してゐた弟
 の梅雄はさういはれたので大きな二重瞼をばちと見開いて姉の方を見た。長い
 間患らうてゐるにもかゝはらず不斷から色白の顔は透きとほるやうに白くなつ
 て熱のせぬか兩方の頬の眞中だけがぼろろと薄紅を潮してゐる。

弟が自分の方を見たので姉はもう一ぺん、

『あこ明けまへうか、あんだ寒いことないやろ。』
 と、いつてきくと。

『あけとくれやす。』

梅雄は弱い聲で返辭をした。

お園は立つていつて縁側の障子をどつと開いた。

『はあ、鬱陶しい。かうしたらえゝ心持やる。』

と、いひながら彼女は胸をひらくやうに太息をついてうるさく這ひさがる鬢のほつれ毛を繊細い指先で撫であげながらそこに立つて碧く晴れてゆく蒼空の方にその黒瞳がちの眼を放つた。

そこからは向の家の屋根ごしに智恩院の森も見えてゐた。低い築地塀に取圍まれた狭い庭には今しも一本の桜花が春雨のあとの花いきれを立てながら眞盛りに咲きほこつてゐる。

『ちよつとこの花を見とみやす。そこから見えますか。よう／＼咲いてますやろ。』

姉はさういつて少し身をひらきながら病床の上の弟の方を振顧つた。

梅雄は熱に上氣したやうな顔をもつ憂さうに枕の上に横向きにして、姉の言葉につれて庭の方を眺めた。熱臭い部屋の内に暖い日光と／＼に花の匂を含ん

だ新鮮な空氣が流れるやうに入つてきた。

長い間冬の寒さにいぢけてゐたものを何もかも一時に蘇らすやうな麗かな春光は今靜に天地に漲つてゐるのである。

『姉さんもう去んとお化粧がおそならへんか。』

病のせいで神経が過敏になつてゐる梅雄はさういつて姉の歸るのが遅くなりはせぬかと氣にした。

『まだちよつとくらゐかまへん。お母はんが歸らはるまでにこれだけして仕舞ひまへう。』

お園は縁側から入つて來てもとの座にすわつた。そしてぼうつと汗ばんだ顔をして、

『おう暑。』

と、いひながら黒縮緬の平常羽織をぬいで傍におしやり、も少しになつてゐる

めれんす友禪の蒲團の衿け残しを取上げた。

『これ着たら、あんた身體が軽うなりまつせ。』

さういひつゝお園はせつくと針の手先をいそがした。すんなりとした身體に映りのいゝ高尚な黒地に白い立縞のあるお召の綿入れを着て針を動かしてゐる肩先が細つて纖弱さうに見えてゐる。

『はやう良うなつてたら、私も姉さんの太夫さんの姿が見られたんやがなあ。』姉の針を運ぶ手先を見るともなく寝ながら見まもつてゐた梅雄は長い自分の病氣をかこち聲にいつた。

『そんなもん見んかてよろしいから、どうぞ精だしてはやう良うなつとくれやす。』

姉は元氣をつけるやうに口ではさういつたが梅雄の病氣は遂に見込みはなかつた。

今年十八になる梅雄は小學校を卒業すると間もなく好い手づるがあつてさう電氣會社の給仕を勤めてゐたのであつたが温順しいうへに何より學問が好きなので月々もらふ僅かばかりの月給を持つてかへつてくるといつもそのまゝ一度は母親の手に渡して、その中から自分の小使にと分けてもらつた錢で英語や數學の本を買つては獨りで勉強をしてゐた。小學校を卒業したばかりで中學校にゆくことの出来ぬのが何よりも悲しかつた。十三の歳に父親に死別れてから、あとには母親と自分には四つ年長の姉のお園と三人きりの、はかないわが家の生計に年老いた母や若い姉が苦んでゐるさまを子供ながらもよく知つてゐるので同じやうに小學校にいつてゐた良い家の子供達が今はいまな制服姿で中學校に通つてゐるのに、自分は朝會社へのゆき道に、時々以前の友達に行きあふことがあるのが何ともいへない恥しく羨ましいのを、思ふまゝにならぬのが今の自分の境遇とあきらめて、世間の子供が遠足だの活動寫真だのと遊ぶことに

心を奪はれてゐるのに梅雄は無駄づかひ一つしよともせず中學校にゆくかはりに晩に會社から退けて歸つて來るとあとは家の内に引籠つて獨學自修に餘念もないのであつた。

去年の暮にふと風邪をひいて十日ばかり會社の方を休んでから、それは間もなく癒つてまた今までのとほりに毎日出勤してはみたけれど、どうかすると身體に熱のさしひきがあつて段々出勤も怠りがちになつてゐたが正月になつてからどつと寢ついて、そのまゝ枕が上らず醫者は遂に結核といふ無慘な宣告をさへ下してしまつたのである。

それでも自分ではそんな病とは知らぬから、いつかは快くなるおりが來るものとばかり思つてゐるのが傍にゐる母や姉の心にはいつそいぢらしかつた。

『あゝ僕こんどようになつたらどないしてゝも東京にいきたい。東京にいてどんなことしても勉強して出世して、早うお母はんや姉さんを樂にしてあげんなら

ん。姉さんがいつまでもそんなことしてゐてはどもならん。』

梅雄は昂奮したやうな顔をしてまたしてもよくいふことを繰返した。

『早うようになつとくれやすや。ほしてお母はんや私に安心さしとくれやす。』

お園は針の手先をいそがしながらつとめて病人の機嫌に逆らはぬやうに弟の對手になつてゐても、そのことをいひだされるのが何よりもつらかつた。

お園は今葛城太夫といつて祇園で賣れ妓の太夫であつた。

それまでは西陣の邊で古くからかなり手広く友禪屋を営んでゐた人の好い父親が、退かれぬ義理から他人のために招かぬ損をさせられたのが家運の傾くはじまりで、ひきつゞいて焦燥ればあせるほど思ふとほりにゆかぬ商賣の失敗から氣落ちがしてそれが病みつきになり、長い間わづらうて死んでいつたあとは、もう自分達の住んでゐる地所つきの家さへ借金の抵當に人手にわたるばかりになつてゐて、子供を對手の女手には、それをどうする術もなかつた。それ

でもまだ二三年が間はどうかして親子三人のものがその日その日のことには貧しいながらも困らぬだけのことはできたのを、手をつかねて居食ひをしてゐるのも勿體ないとよしない女の考へからお園が勝氣な氣性にまかせて仕馴れぬ小商賣をはじめたのがよくなつて、それがために一年とたぬうちに、またもや女には脊負ひきれぬほどの新しい借金をさへこしらへてしまつた。

『お母はん、わたしがしばらく身を沈めればえゝさかい。』

母子して散々思案をしつゝした揚句のはてお園は到頭一家の不運を、その纖弱い女の身一つに脊負つて今から二年ばかりまへ櫻花ならば今からが盛りといふ二十の年の十月に町家そだちの堅氣の身を可惜祇園の遊廓に沈めてしまつたのである。

けれどもお園の考へは間違つてゐた。さらば良い家の娘といふほどではなかつたが、親譲りの鷹揚な性質は幼い時から世間の荒い風波にも當てられず、

これまで苦勞といふことも知らずにたぬうつと育てられたので、親兄弟のためにはうら若い女が自分の身を苦界に沈めるといふことはそんなに悪いこととも卑しいこととも思へなかつた。さう思はぬばかりではない、芝居や淨瑠璃で見てもさういふところにゐて卑しい憂き勤めに人知れぬ悲惨の涙に泣きくれてゐるやうな女はみな美しく哀れであつた。おかるの身賣りを見ても宮城野しのぶを見てもさうであつた。お園は遊廓に身を沈めることが好いことのやうにさへ思はれた。

愚鈍なくらゐ堅氣一方なお園母子は勤め奉公といへば昔から人の卑む、つらい稼業であるとは知つてゐても一旦そこへ身を沈めたが最後容易に脱け出ることの出来ぬ恐ろしい地獄であるといふやうなことは深くも思ひ及ばなかつた。さういふ場合に相談對手になつてくれるやうな近しい身寄りといつてもなかつたので二人はほんの一寸の間のつもりで女衞の手にかゝつたのである。

『まあ規則は規則どすさかい、こして四年の年期にはなつて、もそないに長いこと勤めんかて二年もたゝんまに借金は拂へます。またそのうちにはえゝお客さんが附きますさかい、ほしたら半歳か長うて一年も辛抱してゐやはつたら仕合にしてもらへまつさ。いはゞ出世の近道見たいなもんどす。』

判人は身の代金と引換へに仕切りの書附を収めながらそんなことをいつた。それが實際に廓の内部に入つて見ると、素人かんがへに聞いてゐたとは大變な相違で、前借の返済はおろか、浮華を競ふ遊里には義理とか外見とかいろんな遊里の習慣があつて出錢ばかり多く、厭でも應でも屋形から新しい借金でもせねば、どうしても立ちゆかぬやうな仕組みになつてゐるのであつた。そこへまた思はぬ弟の難病でおそのはどちらを向いて見ても錢の入ることのみで、だんだん借金の深味に陥つてゆくよりほかはなかつた。

『今もうそんなこといはんとおいとくれやす。あんた病氣やさかい、そんなこ

と考へんと氣張つて早うよなつとくれやす。』

お園はそんな考へには、そつと蓋でもしておきたいやうに目を瞑つて顔を慄はすやうにした。

『僕の病氣で姉さんにばかり責任がかゝつて仕様あらへん。もちよつと辛抱して待つてとくれやす。僕が癒つたら、どないにしても姉さんを救けるよつて。』
梅雄は今にも自分の病氣が本復するやうな心持ちになつてさういつた。

『どうぞはやう救けておくれやす。』

お園はさういひながらも一心に針の手をいそがした。

互にいたはりながら姉弟がしめやかに物語る間にも、そよくと外から流れこむ爽かな白晝の風には庭に咲きこぼれた櫻の花や山吹の甘い匂ひがそこはかとなくたゞよつてゐる。

『そやけど姉さん、僕の病氣はとても癒らへんえ。』

しばらく黙つて天井の方を凝視めてみた梅雄はじれたやうな鼻聲になつてさういつた。

『なんでです。』

『なんでちうこともあらへんけど、何やし私そんな気がする。私昨夜悪い夢を見た。』

『どんな夢でした。』

『私、どこや知らんなんでも河原の上の方見たいところで會社の友達と遊んでゐるところへ死なはつたお父はんが、どこからかふつと出て來やはつて、お前そんなところにみたらあかへんさかい、お父はんのゆくところへ一緒についていてやる。こつち來い、こつち來い、いはゝつて暗いくらい大きな樹の生えた山の中を通つて大文字さんの山を越して遠いところへ連れていかはりますから、私しんどうてしんどうてよう歩かれしまへんやろ。ほで私ちつと道ば』

たへ立ちどまつてゐると、さあ早うはやういうて手をとつて引いていかはりますから、わてえあんまりしんどうてふつと目がさめると、體中汗でづくづくになつてた。』

お園はそれをきいて氣にかゝつたけれどさあらぬ風に、

『さうですか。そやけどそら夢どすもの。そんなん夢くらゐ氣にしてたらあかへん。そなこと氣にかけんとおきやす。』

さういつて慰めてゐるうちに蒲團の衾けがやつとをはつた。今着て寝てゐる蒲團は重いからといつて、お園が自分で苧姆をつれて友禪の皮と綿とを買つて來て、お花にゆく暇々を見てはやつて來て自分で仕立てたのである。

『さあ、やうく出來ました。』

お園は衾けをはつた蒲團をそこへ擴げて、ところく針のあとを摘んで見たり絲屑を拾ひとつたりして着てゐる先の蒲團をとつて新しいのと取換へた。

『へえ、おうきに。えらい軽うなりました。』

梅雄は床の中で身動きをしながら新しい蒲團の柔か味を病み疲れた身體に感ずるやうにいつた。

お園はそこらに取り散らかしたものを一つひとつ片付けて、襟先きを搔きあはせ、脱いでおいた羽織をきて、細かい金細工の紐をかけ、たつぷりと半襟まで這ひかゝつた銀杏返しの多い頭髮をちよつと撫でつけるまねをして、そこに坐りなほした。そして細い煙管に軽くつめながら二三服たてつゞけに吸つた。

『お母はんどないしやはつたんやろ。えらい遅いえなあ。』

『もう去なんなりまへんやろ。どないしやはつたんやろ。薬もらひだけとちがひますか。』

『ほかに何ぞ用たしてゐやはるやろ。もうかへらはるやろ。』
さういてゐるところへ、

『ごめんやす葛城さん、みやはりますか。うちでもうかへつてお化粧せんと遅なるいうてはりますつせ。』

さういひながら屋形の女衆が上つて來た。

そして寝てゐる病人の方を向きながら、

『梅雄さんどうです。今日ちつとはお気分よろしおすか。』まだ十八九にしかならぬ女衆は丸髻に結つたひしやげたやうな悪毒氣ない顔をにくくさして葛城のそばに坐つた。

『もう去ぬとこやけど、お母はんがお薬もらひにいかはつて、まだかへつてきやはらへんさかえ。今やつと蒲團がでけたとこやの。』

『あ、ほんに。ようでけました。え、色氣どすなあ。梅雄さんえ、具合どつしやろ。』

『うちの妓もう皆お風呂にいて。』

『え、みないかはりました。墨染さんも今私出てくるときいかはりました。外は花見でそらえらい人どつせ。』

『ほんなら私ちよつと先いぬさかい、あんたお母はんがかへらはるまでこゝにゐてとくれやす。もうぢきかへらはるやろ。』さういつてお園は梅雄の方を見ながら『ほんなら私お清どんにゐてもろて、ちよつといてきまつせ。外に何か用ないか。』

お園は母のかへるまで弟のそばに女衆をつけておいて、一人母の家を出て来た。

二

お園は今日都踊の點茶の出番にあたつてゐるので、それに間にあふやうにお化粧をしなければならなかつた。自分の體でゐながら自分の自由にまかせぬ

因はれの身の悲しさは平常はお茶屋に送られるほかは、めつたに一人で外出あるきさへも叶はぬのであるが、今日この頃弟の病氣が俄に重くなつてからはこ半月ばかり屋形の方でも日頃の勤めぶりに免じて大目に見てくれて體のあいてゐる時でさへあれば、午前だけは、かうして勝手にわが家にかへることを得さしてくれてゐるのである。

わが家とはいひながら、お園が郭へ勤めるやうになつてから、それまで永く住み馴れてゐた西陣の方は引拂つて、母親は弟をつれてこの祇園近くの露地裏にさゝやかな借家住居をして娘からわづかばかりの仕送りではかないその日その日を暮してゐるので、弟がどつと寝ついてから、じめくした露地裏の住居は病氣のためによくないからといつて幸ひ屋形のお寺になつてゐる智恩院の末寺に二三年前に死なれた先住が長い間患らうて寝てゐた離室がまだそのまゝになつて空いてゐたので、そこを借りてこの間から母親をつけて出養生をさして

ゐるのである。

麗かな春の日影を眞正面に浴びた築地堀について松林の中の小徑を曲りながらおそのは薄色の傘に顔を隠して、どんなことがあつても急がぬ静かな歩調で小堀の御門の方まで出て戻りかゝつたが、ふつと今日は朝来しなに急いだために、毎日弟を見舞ふたびに序におまゐりすることになつてゐる山の辨天さまに詣るのをすつかり忘れてゐたことを思ひ出した。

お化粧をいそぐけれどもそれはもうこの間中から何度も着つけままでしてお稽古をしてあるので、これからかへつて風呂に入つて頭髮をあげさへすればそれでいゝ。さう思つて彼女はまた引返して人通りの少い櫻の馬場を智恩院の方へと上つていつた。圓山公園の方へ通ふ往來にはぞろ／＼花見づれが動いてゐるのを避けて、山門の横から曲つて女坂を上つてゆくと綺麗に掃き淨められた花崗石の石礎には松の落葉と、もに薄紅の花片がさそふ風もないのはらく／＼と

散つてきた。そこを上りきるとお園は多勢の男女が階段を上つたり下りたりしてゐる智恩院の御本堂の方を向いてちよつと頭を下げて、そのまゝ高い木魚の音の冴えわたつてゐる廣い境内を素通りして鐘樓の方から山道を通りぬけてやう／＼公園の見晴し臺まで出てきた。此頃では毎日一度は辨天さままでは上つて來るのではあるが、此方の山道はいつ通つたか、しばらく歩いたことがないので、それに雨後の陽氣が俄に暖くなつたので、おそのは心持ちの悪いほど汗ばんだ體をその置石に腰をかけて、どこからともなく花の匂ひを送つてくる爽かな微風に吹かれてゐた。

向の方を眺めるとこの間の春雨で急に淡蒼く色づいた祇園の森の彼方には四條の大通りから黒い藁の立ち並んだ下京をかけて蜿蜒とした愛宕つゞきの山のはてに鳥羽野の方の片田舎までが一樣に淡紫の春靄の底に穩かに眠つてゐるやうに展けて見える。お園はすぐ眼の下の南座から東西兩本願寺、七條の停車場

と、中で目に立つ高い建物に見るともなく目を留めてゆくとずつと先の方に東寺さんの塔が模倣として夢のやうに立つてゐるのを認めた。それを見ると彼女はふつと薄ら悲しい感じが胸に迫つてきた。

自分なぞの知らぬずつと以前にもうその家は死に絶えて、今ではお母はんの腹違ひの兄弟が一人残つてゐるばかりやけれど、何でもお母はんの話しにきいてゐるのでは、お母はんの生れた家といふのはあの東寺の果てに見える田舎の大きな農家であつたといふことや。こゝからは智恩院の森にかくれて見えぬけれど、遠くに霞んで見える西山の方を見るにつけても思ひ出されるのは西陣の方のことである。今では電車が便利になつて京極や四條あたりへ出て來るのはわけはないけれど、自分がまだ子供の時分には西陣といへば京の中に、も一つ京があるやうに一郭別になつてゐて、春は嵯峨や御室の野遊びにも、秋は夜長のつれづれにその頃まだ生きてゐた姉さんと一緒にお母はんにつれられてよ

く見にいづつた見せ物や小芝居杯にまで懐しい思ひ出が残つてゐるのであつた。

その美しかつた姉さんは、お父はんより一年前に方々いゝところから嫁入りの話があつたのを仇に聞きながら丁度今時分春雨にさそはれて花びらのちるやうに二十一で敢へなくなつた。そのころから一家は急な落目になつた。以前はまだ家も困らず両親が堅氣であつたから幼い時から三味線は糸道がついてゐるくらゐで藝事などもあまり仕込んでゐなかつたし、それに藝妓といつては此方で望むやうな纏つた金を貸してもくれなかつたので、つい仲に立つ者の口車に乗つて、同じ勤め奉公とはいひながら、昔はとにかく今では藝妓といふよりは人聞のわるい太夫に身を落したのであつた。

けれども今更それを悔んだとて仕方がない。どうせ自分はこんな薄命な身に生れ合したのやからそれはもう諦めてゐるけれど、氣にかゝるのは弟の病氣である。お醫者さんのいはれるのでは、とても救ふことはむづかしい。もしも

そんなことになつた場合には自分は不具同様な體やし、遠い先祖からつゞいてゐる松野の家の血統はこゝで斷絶してしまはねばならん。どうかしてかけ換へのない弟の一命を取留めることが出来るなら、どんな情けない憂目を見ても厭ひはせぬ、たとひ自分の體をないものにして、ももとの壯健な體にしてやりたい。さう思うてこの頃ではもう日夜そのことばかりに心を碎いてゐる効もなく、とてもふたゝび本復する見込みはないらしい。

いそがねばならぬのもうち忘れて、お園は四邊の景色が陽氣であればあるほど、その麗かな春の眺めの底にどこからともなく湧いてくるうら悲しい頼りなげな春愁に胸をとぎゝれてついうつとろと思ひわびてゐた。

すると不意と誰か背後から來て黙つて肩のところを押へたものがあるので、お園はびつくりして振顧ると、それは笠原春雪といつて、この春まだ寒い頃東京から來て京都の地に足をとめてゐる畫家であつた。

『ほ、あんたはん、散歩どすか。』お園は蒼白く沈んでゐた顔に急に元氣づいたやうな微笑を浮かべながらいつた。

『あ、あんまり好い天氣になつたもんだからぶら／＼歩いてきた。』春とんびを脱いで左の手に掛けた笠原はさういひながらそこに突立つて額の汗を拭きふき

『そして病氣はどうだね。あんた一人でどこへいつたの。』

『へ、おうきに。やつぱり同じことゝす。私今お母はんのところから出てきて、これからその辨天さまにおまゐりしてすぐ屋形かへるとことす。』

『さうか、やつぱりあの病氣ではねえ。今日もこれから都合がよかつたらちよつと寄つて見ようかと思つてゐたんだが、今うちにおかあはんがゐるだけかね?』

『さうどつか。何時もいつもあんたはんには深切に見舞うてもらて、ほんまに内でも喜んでます。そやけど今はいかんとおいとくれやす。お母はん今藥とり

にいかはりまして留守どすさかい、屋形の女衆にちよつとめてもろうてるとこどすから。』

お園は四邊に氣をおくやうに低聲でいつた。

まだ知つてからやうく一月あまりにしかならぬのであるが、どこか氣に染んだところがあると思はれてその客はひどく自分を深切にいうてくれて初めて逢ひそめたときから親や兄弟はあるかとか、どういふ理由でこんな境遇に身を沈めたかとか、何處の生れで年はいくつになるかとかいろいろ身の上を聞かれて、それから五日め七日めぐらにはきつと知らしてくれて寄せてもらひさへすればいつでも二日も三日も花を附けて遊ばしてくれて、晝間は顔がさすから一緒に出歩くことはせぬけれど、一人でゆくなら何處へでも好きなところへゆけ、自分はこゝにゐて繪を描いてゐるからといはれるまゝに、

『ほんならえらい勝手どすけど晩までお母はんのところへ遊びにやらしてもら

ひます。』

といつて、わが家へかへつて来て母親や弟のそばで何時もいつもゆつくり骨のぼしをするのであつた。弟が患ひついでからはまた格別に氣をつけて、樂花を附けて自宅へやらしてくれたり偶には餘分な小遣などを心配してくれて、此度出養生をさすのにも内々力を添へてくれたのであつた。それから自分でも時時弟の好くやうなものなどを買つて見舞ひに来てくれることもある。けれども古い郭の習慣を重んずる土地柄とお客が抱妓の親元へたづねて來たりするのは殊のほかやかましいうへに、多勢の抱妓の手前を加減しいく日頃自分を可愛がつて、親のところへも勝手に出入りさしてくれてゐる屋形の姐さんの思惑も考へねばならぬので、滅多にやつてこられて、もしもそれが屋形に知られるやうなことがあつては困るのであつた。

『さうか、ぢや今日は止さう。』

「どうぞさうしとおくれやすな。えらい勝手いうて濟んまへんけど。それに私今日點茶の出番どすさかい、これからお参詣してすぐ往んでお化粧せんなりまへんよつて。あんたはんこれからどこへもおいきやしまへんのやつたらそこまです一緒にいきまへう。」

『あゝ、さう、今日だつたな。』

『さうどす。今晚どす。あんたはん私を描いとくれやすのやつたらどうぞ見に來とくれやすな。』

笠原は繪でも日本畫の方なので、祇園の郭には今はもう絶えて見られなくなつたが四條の大通りがまだ今のやうに傷々しく破壊されぬ前までは微暗い格子先の巷路を素足に絡はる緋縮緬の蹴出しを踏みわけみつあしで練りながら茶屋入りをした華麗な古めかしい太夫姿をこの葛城に見立て、心ゆくばかりの繪に描き活かして見たいと、かねていつてみたのである。

『さうだ。ぜひ拜見にゆくよ。』

笠原が葛城の太夫姿を繪にして見ようと思つたのもとく半ば繪師がする粹興の筆ずさびに思ひついたのではあるが、一つには彼がこれまで繪行脚をして到るところの土地々々で常に見ることを怠らなかつた數ある女に比べて單にその縹緞姿態の嫵々としてさながらに古い浮世繪にでもありさうな、見るから頼りなげな風情のこぼれてゐるばかりでなく、その起居振舞から氣質や物の言ひぶりなどにも、媚を賣る女でありながら不思議に卑しくない、名ばかりは太夫と呼び慣れてゐてもその實骨荒く人づれのした今様の女の中にはめづらしい浮世ばなれがして、今尙ほ狹斜の巷にありし世の香ばしい名をとめ粹を解する者の口にいつまでも語り草となつてゐる島原の吉野とか夕霧とかいつたやうな古名妓が名残りの面影がどこかに忍ばれるやうな心持ちがしたからである。

『どうぞ來とくれやす。ほんならそこまで一緒にいきまへう。』

『ちや私もこれから公園の中を一廻りして宿へかへらう。』

『さうおしやすな。』

二人はそんなことをいひ交しながら、そこを立つて眞青な雑草の崩えでた原つばの中に開かれた細徑をひろうて辨才天を祭つた小さい祠のある崖下の方へとだら／＼おりていつた。

『私おまゐりしますよつてちよつと待つてとくれやす。こゝ何でもよう頼むこときいてくれはりまつせ。』

お園はさういひながら辨天さまの社前に進んで帯の間から小さい銀貨入れをとり出してお蠟燭をあげたりお賽錢を投げこんだりして、合掌した二本の白い人さし指を額のところにつけてやゝしばらく祈願をこめてゐたが、それがすむと帯の上に掌をくみ合したまゝ小さい御堂の廻りを三遍ほどぐる／＼まはつて出てきた。

そこから二人はまた連れだつて、手入れのといいた樹蔭の散歩道を迂曲しつゝ、ぞろ／＼上つたり下りたりしてゆく花見づれの間を縫うて平野屋の前までおりてくると、笠原はつと道の片蔭に身をよけながら立ちどまつて、

『あんたはこれからずつと屋形へかへるのやらう。』

『さうどす。』

『ちや私はこれからも少し眞葛ヶ原の方を散歩しながらかへるから、點茶の席が濟んだらきつと來ておくれ。』

『へえ、おほきに。』と、いつたがお園はふとその晩は大阪のお客さんにもぜひにといはれて、薄々約束してあるのを思ひ出して、

『わたしあんたはんのところへ寄せてもらう思うてんのどすけど。もうせんどから都踊の時には寄せてもらふことになつて大阪のお客さんにお約束しておすさかい。』と、思案しかねたやうにぼうつと顔を染めながらいつた。

すると笠原は急に不安な面を曇らせながら、

『そりやいけないなあ。だつて今日は君がめづらしい昔の太夫姿に粧して點茶に出るのだから、私はそれをよく見ておいてあとで美しい繪に描うと思つてゐるんだもの。』と、ねだるやうな媚るやうな調子でいふ。

『そやけど……』と、お園は當惑して少しの間黙つてゐたが、

『點茶だけどすせ、あんなお化粧して出るのは。あんたはんあこお見やしたよけではあんじよう描けまへんか。』

『たよりないことをいふねえ。そりやお花にくるにはそのまゝでは來られないだらうけれど、折角美しい姿に粧うて、その晩君がほかのお客さんのところへお花にいつてしまつたのでは繪を描かうたつて感興が失せてしまつてとても繪なんか描いてみられやしないぢやないか。都踊を見にゆくにも氣がなくなる。』
春雪が四邊に心を配りながら、すばりく江戸辯でさういふのが彼女の耳に

京や大阪のお客のいふ言葉とはちがつたそゝるやうな強い響きを與へた。そして、

『そらさうどつしやろ。』と、どつちつかずの決しかねたやうな返答をしながらちよつと考へてゐたが、

『ほんなら私晩に寄せてもらひます。そのかはりほんまに見にきとくれやす。』

『そりやあのちに君がきてくれさへすれば、私の方でも見にゆくよ。』

『わたし必ず寄せてもらひます。』

『ぢやきておくれ。そしたら都合がよかつたら、おかあはんのところまで一緒にいてもいゝから。……こゝであんまりながく話しをしてゐるといけない。はやく行かう。』

『ほんならさうします私もいそぎます。あんたはんもう何處へも寄らんと眞直ぐに下河原におかへりやすな。』

お園はさういひながら公園の散歩道を歩いて池のある方へおりかけた。すると、

『ほんとに来るか、またいつかのやうに、すぐにも来るといふやうな返事をしておいて、遅くなつてから急に断るやうなことがあるから。何だか怪しいぞ。』
春雪が後から追掛けるやうに戯談らしいことをいふので、彼女はふつと振顧つて、自分もいくらか微笑みながら二足三足戻つて来て、

『あんたはん、まだ私の心を疑ふとゐやすの。寄せてもらうらうたら、ほんまによせてもらひます。』

『そんならいゝ。きつとだよ。』

『よう分りましたやろ。ほんなら私これからかへりまつせ。』お園はさういつて此度はすたく道之急いで公園の群衆の中を脇目もふらずに祇園社の裏から石段下の廣場にで、末吉町の屋形に戻つてきた。

三

お園は傘をつぼめながら格子口を入つてゆくと、店の間の上り口にはもう黒漆の三枚歯がちゃんとしてあつて、紋附を着た男衆の小父さんが用ありさうに立ちうごいたり、稚髷に結つて顔だけ眞白にお化粧をした禿が嬉しさうに部屋入りの刻限になるのを待ちかねてゐた。小父さんはおそのが歸つて来たのを見て、

『あ、おかへり。えらい遅おしたなあ。お清どん葛城さんおかへりやしてえ。』と奥へ聲をかけた。

お園はそのまゝ急いで二階座敷の自分達の部屋に上つてゆかうとして階段を上りかけると丁度奥から姉さんが顔を出して、

『えらい遅いえなあ。あんた今まで何處へいてたんえ。お清どんも、さつきに

おかあはんのところからもどつてきて、あんた先歸らほりましたいふもんやさかい、どないしたんやろおもうてた。』

『えらい遅うなりました。今朝ゆきしなに忘れてましたから私ちよつと山の辨天さまにお参詣してました。』

『さうですか。ほんならすぐお風呂にいて髪結ひさんへゆかんと遅なる。もう二時過ぎたる。ほかの妓みなお化粧出来ましたえ。』

『さうどつしやる。これからすぐいきます。』

お園はさういひながら二階の部屋に上つてゆくと、今日此家のうちから太夫ばかり三人そろつて點茶の出番になつてゐるので、表座敷の紅殻格子の方によせて置いた朱縁の大鏡臺の前には白粉や香油の蒸息の立て籠つた中に墨染と勝山とが艶めかしい不斷着の友禪の長襦袢一つになつて頭ばかりのやうに見える大きな伊達兵庫の頭髪を鏡に映しながら、化粧方の小母さんに手傳つてもら

つて頻りに顔をこしらへてゐるところである。

墨染は自分の頭髮の後から大鏡に映る葛城の姿を窮屈さうに覗きながら、

『お、おかへり。あんたはんえらい遅おしたなあ。髪結ひさんきつう待つてはりましたえ。はやういといでやす。』

『へ、おほきに。すぐいきます。多勢いてはりましたか。』

『そんなことおへんやろ。』

『あ、さうですか』葛城はさういつて自分の鏡臺の處から小さな金盥の中に手拭やら石鹼やらお湯の道具を入れて階段をおりてきながら、

『お清どん、ほんなら私これからお風呂へいてすぐお種さんのところへゆくさかい、あんたあれ持つていといておくれやす。』

『へえ、畏りました。』

さういつて臺所の方から出てきたお清に店先まで送られながら葛城はそこか

らすこし先の松の湯の暖簾をくぐつた。風呂にはもう今朝一度入つたので、それに他妓とちがつてお化粧などに手間のかゝらぬ彼女は熱い日向を歩いてきた體の汗をざつと洗ひ流すと、いそいでそこから新橋のさきの髮結のところへ廻つていつた。

踊りが始つてから目のまはるほどの忙しさにこの頃では三四人の梳手をつかつてゐてもまだ手の足らぬほど、いつもは多勢の藝妓や舞妓がもう朝の内からつめかけてゐるのであるが、大抵みな午すぎまでに歸つてしまつて、あとは水の退いたやうにひつそりとした姿鏡の前にはそれも遅れてきた二三人が坐つてゐるばかりである。

『お、おいでやす。あんたはんえらい遅おすな。』お種さんは今しも出来上つた一人の舞妓のおしどりの鬘に毛筋棒をあてゝ鏡に映る姿と見比べながら熱心に鬘の恰好をつけてゐた顔をちよつと葛城の方に振向けた。

『えらいおそなりました、ほんまにお氣の毒さんどす。』

『いゝえゝ。』お種さんはいそがしさうに手を働かせながら姿鏡の面から、隣りの鏡の前に来て坐つた葛城の姿にどこか寂しさの目立つのを横眼で見ながら、

『あ、ほんにあんたはん弟はんが具合わるいいうて、きつう心配しとみやすさうにおすが、この頃どうどす。少しはよろしい方どすか。』

『へえ、おほけに。まだやつぱり同じことやので、こまつてます。』

『さうどつか、そらいきまへんなあ。』

そのうちお種さんはやつと頭髮から手を放したので、今まで鏡の面のみを見てゐた藝妓はやつと葛城の方を向いて兩方で、

『今日は』

『今日は』

と軽い會釋をかはして、かへつていつた。

やがて葛城の後に來て立つた梳手は銀杏返しねもとの根元に鉄はさまいを入れて、かちんと元結もとゆひを切つて手早く鬘まげをほぐし、素直すたはな多い毛けを疊たみの上みうへまでばらくと這はひ亂みだして、ふけを取つたあとを小さい濡ぬれ布巾ふきんで力ちからを入れて癖くせをなほしながら、『ほんまに葛城さんの毛けはえゝ毛けやは。こんなんやつたら、ほかの毛けを入れんかて兵庫ひやうごに結ゆへまつしやろえ。』

『おう、おう。そないに賞ほめとくれやしたら私わてえどない云うたらよろしいやろ。』
『今日けふはあんたはんが點茶ぶじやにおでやすのやちうて。も、えらい人氣にんきどつせ。私わたしも葛城かつらぎさんが太夫たいふさんに粧やうしといやすとこ一遍見べんみとおす。』

『どうぞ見みにきとくれやす。』

『ほんまにいきとおす。皆みなそない云うてはりまつせ。あんたはんやつたら、昔むかしの太夫たいふさんのとほりにそら美しいやろちうて。』

そんなことをいつてゐるうちに癖直くせなほしもすんで幾度いくたびも綺麗きれいに梳すかれた長い黒くろ

髪かみは漆うるしのやうな光澤つやを生じやうじて脊せに垂たれた。丁度ちやうどそこへ、

『ごめんやす。』といつて、屋形うちからお清きよどんが髪飾かみかざりりに用もちひる大櫛おほぐしだの花釵はなかんざしだの筭かうがひなどを入れた小匣こばこを抱かへて入はいつてきた。

しばらく手を休やすめてゐた結手ゆひてのお種ねはその綺麗きれいに梳すかれた髪かみに毛筋棒けすぢぼうを入れ一本ほんの毛けも亂みださず前髪まへがみは前髪まへがみ、鬘まげは鬘まげと巧たくみに分けとり、思おもひきつて耳みみの下したまで大おほきく鬘まげを張はつて、一番ばん後に赤熊しやくぐまを入れて鬘まげを結むすぶと、見みるみるうちに京きやう風の伊達兵庫だてひやうごの頭髪かみは恰好かつかうよく出來上できあがつた。それに花櫛はなぐしやら八本ほんの大簪おほかんざしやらを挿さして、最後さいごに長崎ながさきといたづらとを飾いさりつけると鏡かみうらつに映おそる細面おほもての色白いろしろの顔かほが、ちやうど人形芝居にんぎやうしほの雛絹ひなぎぬのやうに可愛かほいらしかつた。

そこへ屋形うちから俵わたが迎むかへにきたので葛城かつらぎはそれに乗のつてかへつていつた。

格子先かうしで俵わたを降りて重い頭あたまを大事だいじさうに家うちの内なかに入はいつてゆくと姉ねえさんは、

『おう、おう。えらい早はやう、ようでけました。』と、起たつてきて頭あたまのぐるりをと

みかうみして『さあ彼方へおあがり。私手傳うてお化粧してお化粧してあげます。』

『へえ、どうぞ。』といひながら葛城は階段を二階の部屋に上つていくと、もう墨染も勝山もすつかり顔のおつくりが済んでこれから衣裳を着けやうとするところで金糸銀糸で刺繍をした襦袢や厚ぼつたい前帯などが足の踏み場もないまですにとりひろげてある。

葛城は姉さんに手傳つてもらつて念に念を入れて厚く白粉をつけて、それから下地の好いうへに更に眉黛で眉を刷くと、黒腫がちの二重瞼から眉のあたりが一層引立つて見えてきた。そして子供のやうに小さく引結んだ唇にそつと口紅をさしてもらふと彼女は鏡に映る顔を眺めて自分ながら見ちがへるほど美しくなつた。

着物は緋縮緬の下着に上が二枚黒縮緬の三枚襲ねに、源氏車に青柳を繡ひつた高尚な黒縹子の前帯を胸一杯に大きく結んで、白羽二重に金糸の繡をした

襦袢の襟裏を紅く返して、それに緋と銀とで有職風の簾垂れ模様を脊一面に刺繡した水色縹子の襦袢を被ると、白襟の片方さへ紅裏を返してゐなかつたなら太夫といふよりは歌舞伎芝居のお姫様といひたいやうな上品な姿に出来あがつた。

『まあ、まあ、綺麗なわ。葛城さんには高尚のんがよう／＼似合ひますえなあ。』

『太夫さんやなうてほんまに八重垣姫のやうどすなあ。』

階下から女衆や芋傭までが上つてきて多勢で葛城の周圍を取巻いて口々にその美しい姿をほめた。

『なあ、へ。この見立て丁度あんたによう似合うたえなあ。』

姉さんも少し後にさがつて遠目に眺めながら、満足したやうにいつてくれる。

『さうどすなあ。』葛城も嬉しさうな顔をして鏡に映る姿を飽かず眺めてゐた。

姉さんを初め皆から『弟さんがもしものことがあつたら、葛城さんはほんまに狂氣にならざるやろ。』といつて心配してゐてくれるほど、この頃はもう明けとも暮れても弟の病氣ゆゑに心を腐らしてゐる葛城も、さうして美しく粧した姿を皆に賞められて見れば、流石に自分でも氣がまぎれて、自然と心もいくらか春めいて来るやうであつた。

『お母はんに葛城さんがこないしてるとこ一遍見せてあげたらえゝのやけど、とても來られへんやろなあ。なあお清どん。』姉さんはそこに突立つてゐるお清の方を向いていつた。

『さうどすなあ、私ちよつとさういうてきまへうか。なあ葛城さんお母はんきられますやろ。』

『お清どんせいいていて、梅雄さんがえらう悪うなかつたら、あんた代つておつて、お母はんにちよつと見においでやすいふとくれやす。』姉さんはさういつた

けれど、葛城は、

『姉さん、そやけど梅雄が見たがりますといけまへんさかい、もうそんなこといはんとおいとくれやす。』と、いつてことわつた。

『さうどつか、ほんならお清どん行かんとおきやす。』

姉さんはそれから三人の立姿を見たらうへにも眺めて着物の裾さばきや柄襦の脊の恰好を何遍となく直してやつと氣がすむと、

『さあ、もう皆よろしい。やがて時どすやろ。』
と合圖をするやうにいつた。

さすがに長閑な春の日もやうく西山の頂に傾きかけると、郭の夜は暮れをも待たず妓樓々々の軒先に吊した紅提燈の火影より瞬きそめて、一日の行樂に遊び疲れた花見歸りやこれから夜櫻を見にゆく連中や都踊にゆく人で、祇園町

の大通りから花見小路にかけて晝の賑はひにも倍して人足に景氣づいてくるのである。

やがて五時になると一同部屋入りをするので、春本からは三人の太夫姿が揃つて小路も狭しとばかりに揺ぎ出た。静かな横丁から四條の通りへかゝると華麗かな衾襦姿に眼を奪はれた群衆は、

『そら太夫はんや。』

と、さつと道をひらいてぞめき囃した。中には酒に酔ひしれた若い花見連れなどが人込みから、賣色の身にも顔から火の出るやうな大口を利いてゆくのもあつた。葛城はさうした多勢からわが名を呼ばれるのが大地に穴があれば入りたいほど悲しかつた。依頼になるほどの親類とてはないけれど、自分がかういふところへ來てゐることを隠してゐる遠い親類は澤山あつた。お園さんは近頃どこか洛東で仲居奉公をしてゐるといふだけは薄々知つてゐても、今祇園で名の

賣れてゐる葛城太夫がそれだとは知つてゐなかつた。お母はんの異腹の伯父さんは時々商賣仲間のお交際で祇園で遊ばはるといふことをも聞いてゐるので、それがために、これまでもまだ幸にお茶屋で顔を合はすやうなことはないけれど、はつと氣がさして思はず赤面するやうなことがないでもない。

彼女は騒々しい人聲や周囲を取巻いてゐる眼まぐるしい男女の顔にぼうつと上氣したやうな心地になつて、踏み馴れぬ三枚齒の運びも覺束なく、やうくの思ひで歌舞練場の樂屋口までたどりついた。

銘々に割りあてられた部屋に入つて葛城はほつとしながらそこに備へつけてある姿鏡のそばに寄つてまた顔をなほしたり、着つけの襟恰好を繕つたりしてゐるところへ、

『へえ葛城さんお見舞どつせ。』といつて女紅場の男衆が、大皿に盛つたいづ宇の箱壽司をとどけてきた。

『あ、さうどつか、おうきに。』

といつて葛城は、一心に鏡に面して頭をなほしてゐた顔をちよつと後に振顧つた。彼女はその通し物に添へてある紙片を見て、ちよつと考へるやうな顔をしたが、わざと名前は變へてあるけれど、すぐ思ひ當つた。

獻茶の式には今年初めて出るので、どうかと氣遣つてゐたけれども稽古の時から數多い藝妓達の中にもすぐれて好い筋やといつて先生から賞められてゐたお手前ほどあつて、さういふ姿に着更つて衆目を一身に集める時がましい席に出て見ると、不思議とひとりでに氣分も平常の自分と違つたやうな心地になつて、五番とも手際よく御殿の式を済ますと、葛城は舞臺の方から最後の踊の三味線や太鼓の響きが一つになつて澁むやうに聞えてくるのをさゝながら夜寒の中を俵で屋形へ急いだ。

屋形へかへつて來るともう五六軒のお茶屋から電話が掛つてゐた。中には二

三軒あまり行きつけぬお茶屋の名があつたが、木屋町のお客で入つてゐるところからも下河原のお客でいつてゐる茶屋からも知らしてきてゐた。

『松池はんから、先刻から、も何度もかゝつてきてますのどつせ。あんたはん何處へいかはります。そないいうて斷るところは、も斷はらんなりまへんさかい。』お清は葛城が自分の部屋に上つてゆくのを後から二階について來てさういつた。

『さうどつか。』と、葛城はちよつと考へるやうにしたが、すぐ『ちよつと待つてとくれやす。』といつたまゝお清に手傳はれながら靜つと重い襦袢と前帯だけをとつて、鏡臺の前に坐つて花櫛や笄を一つひとつ抜きとつた。そして濃く化粧つた顔の白粉を油で拭きとらうとすると、着物の始末をしてゐたお清は慌てたやうに、

『あの葛城さん、どうぞその顔を拭かんとおいとくれやす。松池はんから茶席

のまゝですぐ來とくれやすいはりましたよつて。』

お清がさういつたので葛城はふつと別なことを思ひ出して、そのまゝ顔をなほさうとする手をとめて考へた。

かうなるのやつたら先刻茶席へ出てゆく前に一口誰れかにさういひ置いてゆくのであつたものを。お化粧が遅れたので心がせいたゝめについ忘れてしまつた。あゝして木屋町からも下河原からも箱入りをしてもろて、まだその上に部屋見舞まで通しててくれてゐるくらゐやから、きつと兩方で今時分は踊のはねる時刻を待ちわびてゐやはるにちがひない。茶席では脇眼も振ることが出来なんだから、來てゐやはつたか、來てゐやはらんだかよう分らなただけれど、下河原のお客さんは繪を描くいうてはつたから見にきてゐやはつたに相違ない。茶席のまゝというたかて藝妓とちがひ太夫がこのまゝの扮装でめつた何處へもゆくことはできぬけれど、下河原へゆくんやつたらせめて顔だけはなほ

さずにおかう。……そやけど木屋町のお客さんかて松池から何遍も電話でせいてくるいふし、どないしたものでやる。あのお客さんもいつもの淨瑠璃の縫之助さんや舞妓の花蝶に友菊それから木屋町のお女將はんなど一緒に見にきてゐやはつたにちがひない。大方今時分は木屋町で多勢の一座が華やかに笑ひさどめきながら、私の來るのを今かいまかと待つてゐやはるやろ。……

葛城は、ほんまの心をいへば氣の置けない、自分を丁度友達のやうにしてくれる旅の繪かきの處へゆきたいのであるが、いくら深切だといつてもその方はつい昨今の浅い馴染であるのにひき換へて大阪のお客さんにはまだ店出しをしたそもくの時分からもう三年ごし眞真にしてもろうて、つい二た月三月ばかり前までは、かれこれ一年餘りといふもの、自分が纖弱い女の身一つで母や弟を養つてゐる健氣な氣だてや境遇を愛で哀れんで月々その方の面倒さへ見てくれてゐたのであつた。

『藝妓はんにかて、あんなえ、お客はんは滅多にあらへんえ。大事にせんとあかへん。』

席貸しのお女將はんも松池のおかはんも同じやうにさういつて、何ぞのをりには恩にもきせたり、こちらの爲を思つて意見もしてくれたりするのである。それはもうなんぼうにも身にしてみても知つてゐるけれど、それくらゐだからこちらがその人獨りを頼りに思へばおもふほど向の勝手氣随も漸次と募つて、ほかへお花にいつてゐて、どうしてもその晩外すことが出来なかつたり、今日は必ず行くからといふお約束の日や時間にちよつとでも遅れやうものなら、ぶいと機嫌を悪くして、いくらおそくからでも最終の電車で大坂へ歸つてしまふやうなことがある。そんな時にはもしこれきりになつたら月末のことをどうしようと思つてお母はんや弟のことを思つて氣が沈むのであるが、それでも、『お客といふものは、ほんまに我儘のものや。こつちやではこれほどに勤めて

をるのに。』

と、さう思ふと生來の勝氣から自分でわびて出るのも口惜しいし、あんまりわけの解らぬ怒りやうも厭になつて、そのまゝ棄て、おくと向でも二た月も三月も何の沙汰もなく黙つてほかしておいて、ふとまた向から折れて知らしたりするのである。此次もそんなやうなことから怒つてしまつて、この間まで長く逢はなかつたのをお茶屋と席貸しとでどう仲に入つて取りなしたのか先月の節季に迫つて知らしてくれた時松池のお女將はんがその時から、

『あんた今度しくじつたら、もうおわびの仕様があらへんえ。ほして點茶の時には來てやるといつてゐやはずだから、間違ひなうあんたも來とくれやすや。』さういつてかたく約束してゐたのであつた。それを今自分が顔を出さぬとなると、折角陽氣に花の咲いてゐるお座敷がどんなに白けてしまふであらう。大坂のお客さんのあの氣むづかしい顔やお女將はん達が仲に入つて困らる顔が

眼に見えるやうである。

葛城は鏡に面して見るともなく眞白に化粧つたわが顔を覗きながらそんなことを思ひ惑うてゐると階下から、

『お清どん松池はんからまた電話どつせ。』と呼ぶ聲がする。

『あゝさうどすか。』お清は返事をして『なあ、へ葛城さん此度はどない云うて返事しまへう。』

葛城はまだ心を決しかねたやうに、

『そうえなあ。ほんなら、こない云ふとくれやす。えらい濟まんことどつけど葛城さん、すぐお家へ寄せて貰はんならんいうてましたけど點茶からかへつてきますと、お母はんのところから今夜病人がきつう悪い云うてきましたよつて、すぐその方にいきましたさかい。今晚はお断りいたします。また近いうちお目にかゝつてお詫びいたします。そない云ふとくれやす。』

さういつておいて彼女は重い頭飾りをとり去つて、起ち上つて別の着物に更めた。

お清はすぐまた上つて来て、

『葛城さん、私松池はんかと思ひましたら、ちがひます。木屋町からどす。松池のお母はんもあこへいてはります。ほて、あんたはんがいはりましたとほりにさういひましたらな、あとで大阪のお客さんが自分で電話口に出てきやつて、弟がきつう悪い云ふのは、そら嘘やろ。ほかに好きやんでもあつてそこへいたんやろ。こないにいはいはるのどつせ。何やしらきつうきつうはこやはこやいうてはりましたえ。』

それが大阪のお客のいつもの癖であつた。いつかも木屋町にいつて三晩もつづけて泊つてゐた時、お母はんのところ急に用事が出来て屋形の女衆に呼び出して貰つてお母はんが自分で電話に出ると、その時もやつぱりお客さんが自

分で電話口に出て、

『急な用事といふのは、そら嘘やろ。母子して一緒になつて色男をかぼうてるのやろ。』

さついうて大きな聲でお母はんに怒鳴りつけたことがあつた。なんぼほんくらのお母はんかて、その時だけはよく／＼腹も立つやら悲しいやらで、屋形の姉さんに、

『こんなやつたら私がおもし家で死んでゐてもあの娘は知らずにゐますやろ。』さういうて、つらがつたのであつた。

『まあ、まあ、そないに云はんとおきやす。勤めといふものは昔からつらいにきまつたもんやさかい。あのお客さんかて解るところは解つたお方やさかい、先で何といははつても此方は黙つて辛抱さへしてをればえ。末ではまた仕合せな身にして貰ふいうこともあるのやさかい。』

生れは徳島とか和歌山とかで、幼い時からこの祇園の遊廓に賣られて来て今から二十年ばかり前まで薄雲大夫といつて、長い間全盛で鳴らした覚えのある姉さんはさういつて慰めたのである。

『あゝ、さうどつか。』と葛城はいつたが、そんな具合やつたら、これから行くとまた厭味をいはれたり、明日になつても明後日になつてもかへしてくれないかも知れぬ。さう思つて、

『怒らはつたら怒らはつたで、かまへん。』
彼女は獨語のやうにいつた。

四

『お君どん笠原さんがおかへりやしたえ。』
と臺處の方で呼ぶ聲かするのをきゝながら春雪は階子段の下の薄暗い廊下をつ

たうて自分の部屋にきめた奥二階の方に上つていつた。

と、仲居のお君はすぐ後から十能に火を盛つてやつてきて、

『おかへりやす。まあ寒うおしたやろ。』

『随分寒いよ。晝間はあんなに暖くつても夜になるとまだなか／＼寒い。』

『京都はまた格別寒うおす。』

『いや東京だつて寒い。いつも今頃は雪が降るんだもの。』

『まあ、さうどすか。』

『降るもふるも君、いつだつたか桜花が眞盛りに咲いてゐるのに雪が降つてそれが氷柱になつたことがあつたよ。そら綺麗だつたよ。』

『まあ、まあ、さうどすか、東京ちうたらえらい寒いとこどすなあ。』

お君は火鉢に火をつぐと十能と飲み殻の茶碗とを下げていつた。そして新しい茶を煎れて持つてきた。

『お、好い茶だ。』春雪は熱い茶を一口飲んで、茶碗をひねりながらその中を覗くやうにして、『何ともいへない好い色をしてゐる。これが本當の山吹色だ。こちらの茶はほんとにいゝ。』

『さうどすか。東京にはえゝお茶おへんか。』

『そら好いものといつたら、ないこともないだらうが、ちよい／＼飲むのにこんなのはないなあ。』

『都踊どうどした。葛城さん献茶に出やりましたか。』

『えゝ、出ましたよ。』

『さぞ綺麗におしたやろ。あのお方やつたら太夫さんにお粧しやしたかて、ほんまによう似合ひますやろ。今晚きやはりますか。』お君は微笑みながらいつた。

『さあ、そんなことにはなつてゐるんだが、どうするか。曳手あまたですからな。』

『一遍電話をかけて見まへるか。』

『さうですなあ、かけて見て下さい。』

『畏りました。』お君はさういつて、丸髷の頭を淑やかにさげて襖の外に出ていつた。

春雪は脇息に凭れながら暫らく茶をすゝつてゐたが、やがて煙草が燻きてしまふと、立ち上つて今まで着てゐた羽織と下と對の茶微塵の結城お召の着物をぬいで、八端の襦袢に着更へた。

彼が今度この下河原に繪行脚の旅装を解いてから、やがて二た月近くにもなるので、氣をつけて萎れぬ先からさきから挿しかへてくれる床の間には、もう幾度かその季節々々の眺めが移り變つて、今は爛漫たる櫻花の小蔭に緋絨の大鎧を着けた容齋派の武者繪の軸を懸け、清水焼の花瓶には椿に黄梅が亂挿にしてある。黄褐色の砂壁も木理の見えぬ天井も黒く煤けて随分古く建てたものら

しいが、その代りに目に見えぬところに何處か手が入れてあつて、よく拭きこんだ床柱と隅の方の押入れのところに立てゝある抱一風の八橋を描いた二枚折の銀屏風だけが灯影の中に輝いてゐる。

八疊の座敷の真中に敷きひろげた緋毛氈の上には晝間描きさした繪絹がまだそのまゝになつてゐて、繪の具箱のそばに取り散らかした白い皿には朱や緑や白い胡粉が鮮やかな色に流れ出たまゝ乾きついてゐる。今取りかゝてゐるのはこゝに落着いてから先月の初にまた一週間ばかり月ヶ瀬附近の溪山の眺めを探つたついでに、關の古驛から鈴鹿峠にかけて昔の東海道の舊跡を歩いて寫生帳に収めた、その折の記憶を辿りながら、大阪のさる富豪の依囑に應じて描いてゐるのである。三枚の中一枚はもう出来上つて、砂壁の表にまだ枠のまゝ立掛けてあるのがそれである。それは月ヶ瀬からまだずつと奥の景色を描いたもので、紺碧を湛へた溪水が巖角に激して白雪を噴いてゐる上を一人の樵夫が危

橋を渡つてゐる處で、一叢の杉木立に清香浮動してゐる風韻が遺憾なく出てゐる。

春雪は火鉢の傍によつて腕ぐみをしながらちつと坐つてゐると、晝間でさへすぐ上の高臺寺の山から、どうかすると氣まぐれた鶯が前栽の樹立に飛び迷うてきて鳴くほかは、外をさよめかしてゆく花見連れの賑やかな笑ひ聲ひとつ聞えぬ程の静かさなので、夜の更けるにつれて四邊はひとしほ閑寂としてゐる。どこか近くの席貸では今日この頃の陽氣な春の宵を、わざと祇園町の騒がしさをいとうて浮世離れたこの山の中の奥座敷にしんみりと二人對向ひで忍び逢ふ夜の戀を樂んでゐるものがあると見えて、ぬすむやうな爪びきの音が艶かく聞えてゐる。春雪はそれをきくともなく靜つと耳を傾けてゐると、何處かで聞いたことのあるやうな三味線のあひの手である。さう思ひながら尙ほも耳を澄ましてゐると、幾度も繰返してゐるので、それはずつと前に東京の新橋でち

よつと知つてゐた藝者が自慢でよく弾ひてゐた小唄の「心でとめて」であるのを想ひ浮べた。

心でとめてかへす夜は、可愛いお方のためにもなると、泣いて別れてまた御目もじ、猪牙の蒲團も夜露に濡れて、後は物憂きひとり寢するも、こゝが苦界のまんなかかいな。

それとはつきり分ると、夜が靜かなので唄の文色が手にとるやうに聞えてくる。春雪は思はずそれにひき入れられて、ついそゝられ氣味になりながら、今見てきた太夫の艶麗な姿を思ひ浮べて、それを繪絹の面にうつす工夫を凝してゐた。太夫といへば今では島原が日本に唯一の古めかしい面影の残つてゐるところとなつてゐるが、この間見たその道中姿と今宵の献茶の席で見た祇園の太夫姿とを比べると、島原の方はさすがにまだ古式が多く保存されてゐるだけ柄襦や前帯などの好みが大時代は大時代だが、あまり濃艶に過ぎてあくどい。

それに反して祇園の方はずつと世話に碎けて淡彩で上品に出来てゐる。それだけ祇園の方は今様になつてゐる。併しいづれにしても最早ふたゝび春信や歌麿によつて描かれ、西鶴や近松によつて語られたる遠い美と傳奇の昔に今の時代を後戻りさする術もなかつた。彼は一旦破壊された夢幻の美をどうかしても一度び思ひ活かさうとするやうに眼を瞑つて恍惚と心に過去の姿を追ひ求めてゐた。と、また先刻御殿の茶席で見た葛城の姿が、錦繪の古めかしいまぼろしの中に髣髴としてその鮮麗な色を現はしてきた。ぬけるほど白く化粧つた襟頸に黒絹のいたづらが絡つてゐるのもあどけなく、細面の顔が一層細く見えるほど大きく張つた兩鬢の婀娜めきたるに、玳瑁の大櫛八本の筭銀色燦爛たる花簪を透いたところもなく翳して、京風の伊達兵庫の金元結にとりつけた紅い丈長色紙までが艶めかしく眼をひいた。白羽二重のつゝましやかな詰め襟の片方だけ緋縮緬の裏を返へして、胸一杯に結んだ黒縮子の前帯の下に兩の手を隠し、

観客が息を殺して一齊に視線を集めてゐる次の間の杉戸の陰から舞ぶりの摺り足でしづく現はれて釜をのせた卓の前の床几に進んで腰をおろした。

春雪は、葛城の現實の生活の傷ましさは憐れんでゐるが、この場合彼はたゞ彼女の妖麗なる姿態を愛でゝゐるばかりなのである。古い江戸の錦繪によつて得られる快感を假りに彼女の姿態と色彩の鑑賞によつて代り求めようとしてゐるのである。

彼はいろいろに視點をかへて姿態の變化を想像しながら、それを頭の中で絹繪の面に描いて見た。初め杉戸の陰から立ち現はれてきた正面の姿よりも、また纖やかな手先で袂紗をさばく古風の形よりも、やがて點茶を終つて靜に一禮してあの銀絲の簾垂れに緋の絲でその縁を繡ひとつた脊一面の大模様を觀客の方に向けてゆるやかに引込んでゆく柄箱の後姿を斜に描いて見るのもまた面白と思つた。

そんなにして繪になるほどの美しい光景を、いろ／＼想ひ浮べてみると後からあとから面白い考へが浮んできた。梅幸の十六夜が廓を脱けて出てくるところも滴るばかりの色気はあるが、深紫の綿帽子に面を包み下げ帯にした福助の小春が、黒縮緬の着附けに緋の長襦袢の艶めかしい姿態で花道から舞臺にかかつて格子の外から紙屋の内の様子をそうつとうかゞひながら、そのまゝ用水桶の小陰に身を忍ばすところの風情の方が遙に好ましい。江戸の清元と浪花の淨瑠璃。春雪はそんなことまで次から次へと思ひ樂んで藝術的空想に耽つてゐた。

と、すうつと後の襖をあけて、

『ごめんやす。』といひながらお君が入つてきた。

『まことにお待ちどほさんどした。今さき電話をかけて見ましたら、屋形でまだ點茶からかへつて來やはりまへんいふことゝしたから、もすこし後になつて

またかけて見ます。大若さんでそない云うてはりました。も、ちよつとしたら此方からまたきいて見まほ。』

『あゝ、さうですか。まだ都踊からかへるにはちよつと間があるから。』

お君は立つていつて今春雪がぬぎすてゝおいた着物や長襦袢を一枚々々鄭重に疊んで、違ひ棚の亂れ箱に入れてその上から鬱金木綿の風呂敷を被せかけた。

『こゝも片附けまへるか。それともまだお描きやすか。』

『いや、もう片附けてもらひませう。』とさういつて春雪もともに立つて筆を洗つて繪絹や毛氈を収めた。

『それからねえお君さん、何か出来るものでいゝから、酒を持ってきて下さい。隣家で好い音がしてゐるのをきいてゐると何だか急に寂しくなつてきて堪らな

い。

『ほんまにいな。何家どすやろ。』

『なら繁かな、それとも藤の舎か。』

『藤の舎さんどつしやろ。』お君はちつと耳を澄まして三味の音じめをきゝながら『あの方この頃よろしく来てはりますせ。』

『羨ましい仲だな。』

『そやから、あんたはんも劣けんやうにおしやすな。』

『どうつかまつりまして。いつも捌かれてばかりゐる人間なんですから。』

『きつい云ひやう。今に葛城さんがきやはりましたら、そない云ひまつせ。』

『どうぞ。』

『ほんならちつき持つて参じます。ほてまた一遍きいて見まへう。もう歸らる時分どつしやろ。』

お君はさういつて、すらくと立つていつた。

いつまでも聞えてゐた隣家の三味の音がやがて絶えくぐになつたと思つてゐ

ると、思ひがけもなくすぐ耳の傍で高臺寺の鐘がごろんと一つ高く響いて、しめきつた障子に微かな顫動を興へた。そしてその鐘の餘韻が長い間そこら中に立ち迷うて暫らく消えわづらひながら泣くやうに細くほそく揺れてゆくと、また一つごろんと撞き出す。やがて十一時を數へをはると、三味の音色もそれとともにふつりととぎれて、四邊の夜は一層静まつた。

『おほきにお待ちどほさん。』といつてお君が烏賊の糸づくりに鯉の焼いたのを添へて酒を持つてきた。

『それから今また電話をかけましたんどつせ。ほしたら大若さんでおひやすには點茶からおかへるにはもうさつきにお歸りやしたけど、本人さんの實家にきつい病人やたら出來たいうて、そつちやへいかはりましたさうにおす。ほて、來とくれやすのどすか、來とくれやへんのどつかて聞きましたら、何ともいうていかはらしまへんさかい、内でもえらう困つてます。そない云ふとゐやすの

どすせ。えらい鈍なことでございますなあ。『お君は氣のぬけたやうな顔をしながらさういつて銚子を取り上げた。』

『なんともいひ置いていかないといふのが可怪しいな。』春雪は一口唇につけながら眉根に心持ち不安の色を浮べた。

實家に病人のあるといふのはよくきこえてゐる。それとも急に悪くなつたのであらうか。晝間立ち別れる時には堅さうな口を利いてゐたが、大阪のお客とは遠から點茶の晩の約束がしてあるといつて斷りさうにしたのを、強ひてこちらへ靡きよせるやうにしたのであつた。かねての話の様子では先客には随分長い間ひいきになつてゐるらしい。それをばまだ昨日今日の浅い馴染の自分が、平常ならばとにかく彼等にとつては一年中での最も晴れやかな一日であるべきその今宵の花をば横から出て奪はうとするのは執心がすぎて野暮である。

『寄せてもらひますいうたら、寄せてもらひます。』自分であれほど堅く約束し

てゐたくらゐだから來られるものなら來るだらう。それでももし來なかつたらその時心の決めやうもある。さう思ひきめてしまふと、彼は手にしながら飲みさした盃を一息に乾した。

『どないしまほ。も一遍せいで見まへうか。』お君はつゞけて銚子をさし出した。

『まあしばらく打棄つておいたらいゝでせう。來ないんなら實家へゆくときにさういひおいて出るでせう。』

すると遠くの廊下の方で幽かに話し聲とゝもに人の歩く足音が近づいて、

『お君さん』と、一聲高く内の芋傭が階子段の下から呼んだ。

『はあい。』と、お君はそちらに返辭をして『あ、來やはりました。』

と、いひながら耳を澄ましてゐると階段にさらりと衣摺れの音がして、やがて下からついてきた芋傭があける襖の間から、浮世繪の中からぬけ出たやうな葛城のすらりとした姿が表はれて微笑みながらしづしく入つてきた。人目を忍

ぶために茶席の華美な装ひは一切更めて、いつものやうに年に合はしては地味すぎる黒縮緬の羽織にやつぱり晝間着てゐたとほりの黒地にも少し細かい白の立縞になつてゐるお召の襲を着てゐるので、繊細い立姿がひとしほあでやかに細つて見える。頭髮の飾もみなぬき取つて、伊達兵庫の太い金元結だけが黒いところにきら／＼光つてゐる。顔も柳の葉なりに刷いた眉黛だけを残して頸から上を綺麗に油で拭きとつてゐる。

「姉さん、おほきに。今晚は。」と、青く光る口紅の小さい唇を綻ばせながらお君の敷いた火鉢の向の蒲團にきて坐つた。

「病人がまた急に悪いとかいふのはどうしたえ。」

「そんなことおへんやろ。」訝りもせずにいふ。

「そんなことおへんやろて、先刻お君さんが大若に電話を掛けたら屋形でお母はんのところにお病人が出来ていかはりましたといつてゐたといふぢやないか。」

ねえお君さん。』

「へえ、そない云うたはりました。』口の先でいひながら、お君はうつとりと葛城の鬘を眺めてゐた。

「さうどつか。そら何か屋形の人が思ひちがへしたんどつしやろ。』葛城はさあらぬ體でいつた。

「あんたの内はよう思ひちがへをする屋形どすなあ。』

春雪は戯談らしう疊みかけてさういつたが、葛城はぼうつとしてそれには答へず、

「姉さん、私今恐うおしたえ、幌掛けてましたけどお月さんが明うあかうおつしやろ、ほんであこに木娘がすうつと立つてるのがよく見えまして私傳の上で慄然としました。』葛城はお君の方を見ながら舞妓のいふやうな子供らしいことをいつて、細いへの煙管をとり出した。

『あゝ、さうどつしやる。ほんまにあこのところ恐おつせ。どなたはんかて、そ
ない云うて氣味わるがらはります。』

『晝間見たんぢやそんなでもないがなあ。夜、月の明りにあれは女が袖を掻合
せて立つてゐると思つて見るからさう見えるんだよ。』

『何かそない申しまようか。』お君は立ちさうにして訊く。

『さあ。あんたは。』

『私まだお夕飯たべしまへんのどつせ。』

『都踊では食べないの。』

『あんなん何やわからしまへん。』

『よく食べる人だなあ。どうぞ好きな物を御遠慮なく。』

『ほんなら姉さん、えらい濟みまへんけどなあ』といつて葛城の眺へるものを
よく聞きとつてお君は、

『畏りました。』

といつてまた襖の外に出ていつた。

五

お君がいつてしまふと春雪は嬉しさうに先刻茶席で遠目に見た葛城の顔や頭
髪をまた近くでつくぐと眺めながら、

『よう來とくれやした。大阪のお客さんも今日は來てゐるのやる。』

『さうどつしやる。』葛城は、春雪が下手な京都言葉で戯弄ふやうにいふのを、
またかと笑ひもせず、他人事のやうにいつた。

お客に、ほかのお客のことを訊かれるのは彼等にしては誰れでも厭がるので
あるが、わけてもそんな浮氣稼業をこそしてをれ、ついぞこれまで男に戀れた
といふことのない彼女はそんなうだうだしたことをいひ出されるのを何より好

夫

まなかつた。

『私、今日どこへもお花をお断りしやうか知らん思うてたんどすせ。』葛城は、よくその氣質を知つてゐない者にはやゝ驕慢に見えるやうなぬうつとした顔をしていつた。

『なんでぞす。』春雪は、その澄ました顔をどうかして一遍笑はせねば氣が濟まぬやうな心持ちがするので、またしても京言葉で追ひかけた。

『なんでいふこともおへんけど、今日あんたはんに途中で逢ひしまへなんだら、私お母はんのどこへいと思つてましたけど、約束ちがへるとまた悪いから寄せてもらひました。』

『大層恩にさせるぢやないか。』

『そんなことおへんけど。』葛城は早口にさういつたが、何といふことなく、またしても吾れ知らず氣が沈むやうになつてきて、それつきり口を噤んでしまつ

た。

春雪はあゝまたいつもの癖だと思ひながら、知らぬ顔をしてそうつとその顔を見守つてゐた。

『私いつでも汚うしてゐますやろ。』といつてゐるくらゐ京女には珍らしい色氣や厭味の微塵もない女であるが、青いほど白い顔を今日は眼の邊から頬にかけて肉白粉でほんのりと紅く染めて、小さく見えるやうに彩取つた口紅が舞妓のやうに青く光つてゐる。肌膚の細かい地に白粉や眉黛が心持ちのいゝほどよくのつてゐるので傍で見てもそんな厚化粧をしてゐながら、すこしも厭らしい氣はしない。香油に潤んで漆のやうに雲のやうに艶かな鬢のあたりが水際たつて匂やかである。

『どうしてそんなに沈んでゐるの。』

春雪は脇息の肱を置きかへながら訊ねた。

『私そんな洗んでゐしまへん。』

葛城は紅の脣を小さく綻ばして細面に重さうな頭髪を徐にあげて黒い二重瞼の腫をばちと瞬いた。

口では事もなげにさういつたが、さうなくてさへこの頃漸次心の疲れてゆくのを覚える彼女は弟が重い病の床に就いてからは一入気が洗みがちになつてきた。それをお座敷にいつて客の前で努めて顔に出すまいとすればするほど心が滅入つてどうかすると口を利くのさへ怠儀なことがあつた。騒々しい三味線の音や浮ついた高笑ひの聲が頭に響いて顛顛が痛むやうなことが多かつた。それを知らぬ客や仲居には葛城は氣取つてゐるとか愛嬌が乏しいとかいつて厭味をいつたり陰口をいふものもあつた。此方から別にいふ心はないけれど、つい訊かれるまゝに弟が病氣をしてゐることや實家の困つてゐることを話すと、どうせそんな卑しい稼業をしてゐる者だと頭からきめてかゝつて、大抵の客は嘲け

るやうに笑つて、それをば賣色の女が客の憫みを買ふための例の手管のやうに嘘にしてしまふのである。春雪はそれをよく知つてゐた。葛城はまた、春雪が多くの客と異り、昨今の浅い馴染でありながらまだ廓勤めをせぬ堅氣の時分からの知合でももあるやうに交際つてくれるのをよく知つてゐた。春雪はどうかして女の心を引立てるやうな言葉をかけてやりたいと思ひながら、自分もともにいつい引き入れられるやうに思ひ洗んだ。口を結んだまゝうつとりと美しい女の果敢なさを考へさせられてゐた。

口数の少い葛城は黙つてゐるやうでも彼女の胸にはいろ／＼な想ひが往來してゐた。先刻屋形を出ようとするところへ丁度外から歸つてきた姉さんは、『ほ、あんた今日はほんまに好う出来ましたえ。』といつて賞めてくれた。姉さんは今宵わざ／＼御殿の観客席に入つて自分のお手前を見てゐてくれたのであつた。

『ほしてあんたこれから何家へおいきやすの。』というて聞かれたから、
『わたしこれから下河原へ寄せてもらひます。』
といふと、姉さんは微笑しながら、

『あんた下河原のお客さんよつほど好きなんやな。大阪のお客さん先月から約束してゐたのやから、今日はどないかして木屋町の方にいとあげやしたらえ、やるに。』

さういつたのを、自分で此方へ来てしまつたのであつた。今まで一度も心から男に戀した経験のない葛城は大阪のお客さんを好きも嫌ひもしなかつた。初はこちらから繼つたのでも頼んだのでもなかつたが、忘れもせぬ一昨年の秋店せ出しをしてから一と月ばかりもたつた頃松池からの知らせで家からは自分と勝山と、ほかから二人ばかり、大阪のお客さんで多勢一座した時そのお客に初めて會つた。中一日置いてすぐ二度目を知らしてくればつたさうやけれど、ゆ

くことが出来なかつた。その時は大阪のお客は四日も京都に逗留して、こちらのおくのを待つてゐたけれど到頭待ちあぐねて歸つてしまつたといふことを後になつて聞かされた。それから後も機わるく大阪から来て知らしさへすれば必ず出来るといふやうにはゆかなかつた。それで松池のお女將はんと木屋町のおかあはんとが仲に入つて、此度からはどこへお花にいつてゐてもそこを貰うて此方へ来てくれやすならお客さんにさういうてながしか少なからぬ當座の御褒美を頂いてあげる。その代りお客さんの方でも前以つていつ幾日にはきつと来やはるといふ日をお茶屋まで知らしておくといふことにして双方の約束が成立つたのであつた。けれども永い月日にはそれがそのとほりにならぬ場合もあつた。——だんく馴染みの重なるにつれて楽しい行末のことまで寢物語りに説きかかれて、遠からぬうちには必ず仕合せな身にしてやる。しばらく辛抱して待つてゐよ。さうなれば弟はかねての望みにまかせ、それほど學問が好き

なれば不自由のない學資を興へて東京の學校にも遣つてやる。お母はんとおまへとはどこか閑靜なところに小綺麗な家を持たして氣樂に遊んで暮らせるだけのことはしてやる。さういふ嬉しいづくめの話は今までにもう幾度か聞かされてゐるのである。大阪へも月に一度は必ずお茶屋の仲居がついて天王寺の弘法様にお参詣かたぐひ此方から出かけていつて、此の前が芝居であつたから、此度は文樂座といふやうに閑暢な一日を遊び暮らして、晩には何處か人目に立たぬところで御飯にしてその夜遅く京都にかへつて來るのであつた。大阪では旦那に人目の關の遠慮があつた。多勢の番頭や丁稚を使つてゐるうへにまだ両親もあれば妻子もあつた。そして尙ほそのうへに新町には藝妓あがりのお妾があつてそれにお茶屋を出さしてあつた。かねての話しの様子ではそれがなかなか容易ならぬ女であるらしかつた。人目の多いところへはうつかり一緒に行くことが出來なかつた。芝居や淨瑠璃はいつも前から日を約束しておいて棧敷と

土間とで別々に觀た。「あゝあこにきてゐるやはる」と兩方で氣が附くと遠くから眼顔でそうつと人知れぬ合圖の挨拶を交はすのである。

もとく道樂や浮氣でこんな稼業をしてゐるわけでないのやから、先きで親切にいうてくれはるとほりにしてもらへば多くの人に名を呼ばれて、いつまでもつらい恥辱を曝さずにすむけれど、さうなればこのさきまだうら若い一生を暗い日蔭者で過す覺悟をせねばならぬ。今の憂身をそれにくらべて好ましいといふのではないけれど歴とした正妻のあるうへに既に一人の妾があるところへ、たとひ飽くまで祕密をまもつて人には知られぬやうにかけ離れた京都の地に住まうともそんな境遇に置く自身の身も淺間しいし、人の怨みの罪も恐ろしい。つらい勤めをしてゐれば寧ろそひと思ひに淵河へでも身を投げて死んで仕舞ふかと思ふほど情けない、悲しい、口惜しいこともたびくあるけれど自分が死んだ後でお母はんや弟の悲しみを思へばそんなことも出來ない。こんなに苦

勞するくらゐやつたらやつぱり大阪のお客さんのいふとほりにしてもらはうかとまた思ひなほすこともあるが、ほんならどうぞさうしておくれやすと此方から頭を下げて頼んで出るほどの氣もすまない。その間には向の嫉妬や疑ひもあつたり、それにつれてまた此方の思ひ過しもあつたりして兩方で水臭くなつてしまふやうなことも度々あつた。月々の手當てもこの頃では初めの約束のとほりにしてはくれなかつた。向からさうせねば、こちらからいひ出すこともしなかつた。

實家でお母はんと親子對向ひでそんな先々の話が出る折にも、

『ほんまに落籍してくれはる氣があるんやつたらもう遠にさうして貰うてる。』葛城はさういつて、今となつてはあんまり當てにもしてゐなかつた。

『あのお客さんも今までせんど女に手を焼いとゐやすから、いろ／＼に此方の氣をひいて見てゐやはるのやろ。』

いつであつたか春雪から委しい今の身の入譯を深切に訊ねられたときにもさういつてありのまゝを打明けたのであつた。その折お客さんの身の上ばなしも打明けて聞かされた。一度は奥様も貰はつたさうやけれど、恩のある繪のお師匠さんの愛娘であつたその奥様は、幼い時から、藝事などの好きな兩親に甘やかされて育てられたので、何かにつけて我儘で、それまでもいろ／＼な善からぬ噂があつたが芝居者とやらとの關係はもう世間の口に戸をたてることの出來ぬほどの表沙汰になつてしまつた。今までは、幼少の時からわが子同様にお師匠さんの手許に引取られて、日夕座右についてゐて墨を磨る術から教へ育てられた恩義に縛られて、どんなことがあつても静つと眼を瞑つて無念の涙を呑んで堪へてゐたのであつたが、此次といふこんどはさすがに奥様の親達の方でもそのまゝにして置かなかつたし、常から眞實になつてゐる繪の愛護者の誰れ彼れまた友人のたれかれよりも斷然たる處置に出ることを忠告した。自分が

二十七奥様が二十三の時から、五年の間の同棲に幸ひ子供もなかつたので、その時から春雪は家を疊んで妻を實家に歸し、綺麗な獨り者になつてしまつたのである。

彼には淺草の方で人形師をしてゐる叔父が一人あるきりで幼い時から親も兄弟もなかつた。父親は自分が五つの時に亡くなつたが母親はどこかの藝者であつたといふことだが、それは自分でもよくは知らなかつた。叔父のところには養はれて人形を造る手傳をしてゐたのを、子供ながらに、だれも教へぬ繪を上手に描くので、叔父の家へ時々話しに来るそのお師匠さんの目にとまつて、下谷の家へ弟子に所望されて貰はれていつたのであつた。生みの父母の愛に餓ゑてゐた彼は、氣の荒い叔父のおかみさんにいつも口汚く言ひのゝしられてゐたが師匠の家に引取られてからは、奥様をはじめ皆から實の子のやうに可愛がられた。とり分け師匠にはだれより目にかけて愛せられてゐた。師匠はいい人であ

つた。あゝいふ人にどうしてあゝいふ娘が出来たかと思はれるほどお師匠さんは温厚の長者であつた。春雪はかうして遠い旅の空にさすらうてゐても、娘のこゝろなどがあつてから急に兩鬢におく霜の目立つてきた恩師の慈悲深い温容を片時も忘れることが出来ず、ともすれば旅寝の憂き枕に不貞の妻の身を怨むよりも恩師の寂しい心を思うて暗涙に濕ることも度々であつた。――

その時、

『さうか、それは頼りないなあ。そんなら私が及ばぬながら、どうかしてあげよう。妻君があるうへにまだそんな妾などがあつてはたとへ落籍してもらうて自由な身になつてもあんたも寢覺めがわるい。』

さういつて深切に慰められたので、

『どうぞおねがひいたします。』といつて彼女はうなづいたのであつた。屋形の姉さんには堅く口を噤んでそんなことは何にもいはなかつたけれど葛城の心は

その時分から移ろひそめてゐた。

これまでもとても夜毎に變る多くの男の中には深切にかき口説いて、太夫の心に媚びやうとて浮華な遊びをする客もあつた。半としばかりも通ひつめて身がつまり勘當同様に田舎の親類におあづけになつた若い男もあつた。商用とやらで月に一度は必ず京にくる東京の客は大坂の客と張り合ひをかけて二十日も揚げづめにゐつづけしたことであつたが、それ等はいつのままにかおのづと便りなく風が吹いて過ぎるやうに遠ざかつてしまつた。

『こないにいつもいそがしい體やのに、また不思議や、葛城さんは良縁がえらい遅い。』

屋形の姉さんは、さういつて始終話しにゆくお母はんに向ひ彼女の身について語つてゐるのである。

このお方かて今は深切にいうてくれてはつてもお客の心くらゐ當てにならぬ

ものはない、いつどういふ風の吹きまはしでついとほかの方へそれてゆくか分らない。そのみならず常に處定めず諸方を歩いて繪を描いてゐるやはるといふのやから口では必ず變らぬと堅い約束をしてゐても、末のことを思へば頼りない。さうかというて疑へばまた限りもない。まだ一と月あまりの交際ではあるが正直らしい口のきゝやうといひ、思ひつめたらしい氣性といひ顔を見るたびに口癖のやうに、

『私は哀れな女が好きや。』

というて、京には多勢女もゐるに自分をば二人とない者のやうに愛惜しがつてくれはる心に満更虚偽もなさうに見える。

さう思ひかへすごとに、おのづからまた自分の心も打解けて、優しい言葉をかけられるたびにまだ眞實の戀を知らぬ身にもさすがに懐かしさ頼母しさの思ひはつのであるであつた。

葛城は、自分がさつきから思ひありげにうつとりと考へ沈んでゐる風情に、こちらの氣心をはかりかねて、口をきくさへ遠慮がちにしてゐるらしい男の心をよう知つてゐた。それで先刻屋形を出るとき姉さんに笑はれたことを、男に聞かして二人で樂まうかと思つてよつほど口まで出かゝつてゐたが、空々しい世辭にならぬ彼女はそんなことを蓮葉らしう口にするのも、氣はづかしくてやつぱり黙つてゐた。けれども男の傍に坐つてゐる彼女は向が思つてゐるほどに心は沈んでもゐなかつた。

『大阪のお客さん、ほんとに來てゐるんだらう。かうして來てもらへばきて貰うで、私はそつちが氣になつて仕方がない。』春雪はそれがいかにも氣になるらしく訊ねた。

『來てゐやはつたかて、大事おへんたら。』葛城は少し苛々したやうにいつた。『さうだらう。來てゐるんだらう。』春雪は、今、靜かな夜遅く二人きりかうし

て樂しく對向ひながら、美しい頭髮かたちを獨りで領してゐてもそのまぼろしの姿は明日はまた仇人の花と眺められるのであるかとおもへば戀ゆる心弱くなつた彼は胸が潰れるばかり果敢なく、頼りなかつた。

すると葛城は寂しく沈んでゐた顔をつつとあげて、黒瞳がちの大きな眼で春雪の顔を見まもりつゝ微笑みながら、

『あんたはん、だれにもこなこともういはんとおきやす。』いひよどむやうに前置きしながら『うちの姉さん、私にお金を貸すと、またそれだけでもちよつと私の體が長う繋がりますやろ。そやから私今屋形を出かけるとき姉さん、あんた下河原のお客さんよつほど好きな人やなあ。大阪のお客さんもうこの間から、約束してゐた人やから、今夜はどないか都合して木屋町へいとあげやしたら、えゝやろに。あんたまた月末になつてどないするのえ。こまる場合にはまた内でもどないかしてあげんならんけど。』さういうて笑うてました。』

春雪は、それが何ともいへない嬉しかつた。そしてその一言にわけもない不安の雲を拂はれながら、

『へえ、姉さんそんなことをいうてゐたの。ちや姉さんもう私がどんなにあんたを思つてゐるかといふことを知つてゐるんだな。』彼は微笑しながらいつた。

『そして私達の相談してゐることを知つて、邪魔をするといふやうなことはなだらうか。』春雪は嬉しければうれしいほどまた不安も倍してきた。

『そのこと何も知らはらしまへん。』

『だつて金を少しでも餘計に貸さうとするの。』

『格別さういふこともおへんけど、まあ道理がさういふもんどすしやる。』

この二た月三月大阪の方が途絶えてゐるのは姉さんにも知れてゐたがそれなくては差詰め困る筈の葛城がどうして苦しい意地を立て徹してゐるかは姉さんさへもまだよく知らなかつた。まして大阪のお客や松池のお女將はんや、木

屋町のおかあはんなどに分りやうがなかつた。

『さうか、よろしい。どんなにしても私がこれから立てとほすから、あんたも心が變らぬやうにたのむ。』春雪は、深く思ひ込んだやうにいつた。

そこへ、

『えらいお静におすなあ。』と、お君が膝をついて静つと襖をあけながら、廣蓋に載せたものを運びこんで、一つひとつ塗り物の餉臺の上に並べた。

『さあ、あんたの好きな物が来たから澤山お上んなさい。』

さういつて春雪が見やる膳の上には源五郎鮎の子なます、あなごの天麩羅、それに鮑の奈良漬にいつものとほり鱧の吸物が附いてゐた。膳をこしらへておいてお君が銚子の熱いのをとり立つてゆくと、

『あんたはんもお上りやすな。』葛城はすこし甘えるやうにいつて一番さきに鮑のなら漬に箸をつけた。

『私、これがなによりいつち好きやのつせ。これやつたらなんぼ食べたかて飽かしまへん。』

『さうかなあ。こゝの家でも時々それを出すけれど、私にあんまり好かない。めづらしいのはこの鯉だけだ。これなら毎日一度はいゝ。』さういひながら春雪も箸をうごかしてゐた。

『あんたはん繪もう描けましたか。』

『うむ、よく見てきた。好かつたよ。あれで随分頭が重いだらうなあ。何だか簪がぬけて落ちやしないかと思はれる。』

『そんなことおへんけど頭が痛うおす。』

『あの頸のところ黒い房のやうなものが垂れてゐるのは、あれは何といふもの。』

『いたづら。』

『それから頬のところと兩方の鬢に小さい珊瑚樹のやうなものが下がつてゐるのは。』

『ながさき。』

『私にあのいたづらが可愛らしいなあ。』

『あんたはん早う繪描いとくれやすな。』葛城はまた甘えるやうにいつた。

『うむ描くよ。明日描かう。』

寝る時はぐかりに立つて、細めにあげた戸の隙間から仰いだ空がいつの間にか暈月夜になつてゐたと思つたら、快よくひと寝入りして目覺めた曉方から昨夜はあれほど寒かつた陽氣が俄にまた暖くなつて、しつとりと汗した蒲團を知らぬ間に一枚はぬ除けてゐた。

軒を流れる春雨の音が柔かに枕にひびいた。

二人は十時ごろになつてやつと目を覺ました。昨日一日晴つた春雨はまたもや本降りになつて湿々と前栽の木々を濡らして、絹絲のやうに降りそゞいでゐる。庭のあるじは我ぞといはぬばかりに満開した櫻花は昔の小町をでも思ひ起さしめるやうに雨の中にも眞白に咲き誇つてゐる。小川になぞらへて敷いた木陰のさゞれ石は艶かな濡れ色をみせて、春雨に溶けて落ちた薄紅の花片が、美しい染模様のやうに三點五點そこに散つてゐる。植込みの奥の眞青な笹の葉蔭に降る雨にとまどひした名の知れぬ小鳥が青い羽色のぬれるもいとはず枝から枝に飛んでゐる。

二年近い廓づとめをしてゐても少しも遊里の風に馴染まぬ葛城は、寢床を離れると行儀よく、眞青な地に薄く櫻の花びらを刺繍した半襟のかゝつた長襦袢のうへに直ぐ昨夕の着物をきてそのうへに幅廣の伊達巻だけを細腰がくびれるほど強く巻きつけた。

『よう春雨が降りますなあ。』

しつとりと足に冷つく縁側に立ちながら二人は軒端を流れる飛沫のふりかゝるのも忘れて春雨に濡れてゆく庭の面を眺めてゐた。

『お早うござります。』お君は二人の起きたらしい物音をきいて上つてきた。

『あのお風呂が出来てますよつて、ちよつとお入りやしたらどうぞです。』

『それは結構。』

二人は楊枝をつかひながら湯殿におりていつた。

葛城はまだ襟頸のまはりに残つてゐた昨夜の厚化粧を風呂ですつかり洗ひ流してしまつて、肌膚の細い素顔をほんのり櫻色に染めて濡れ手拭を持ちながら上つてきて縁の欄干にかけた。

あつらへておいた田舎亭の粹な料理で朝とも晝ともつかぬ御飯をあつさりとお済ますと、ほうつとしたやうに薄ら眠い、淡い疲れをおぼえてきた。

『あんたはん、こないしてる間に繪描いとくれやすな、私あとになつたら頭髪を解きまつせ。』

『あゝさうか、そんなら一つ描かうかな。』

春雪はさういつて寫生帳を取つて来て正面から或は横から或は斜に葛城の似顔を色々描いて見た。

お茶を煎れかへて上つてきたお君はそれを見て、

『ほ、粹なわ。』といひながら春雪の黒八の襟のかゝつた襦袢の肩先に顔を覗けて火鉢の向に窮屈さうに口を結んで坐つてゐる葛城の顔と見比べながら、

『よろしく似てまつせ。』

『あんたはん私にもちよつと見せとくれやすな。』葛城は甘えるやうにいつて春雪の手から寫生帳を取つて、わが繪姿を見てゐた。

春雪は、なほ葛城にきゝながら自分の想像を加へて頭の飾りや袖襦の繡ひ模

様を鉛筆でざつと形を附けると、それを水彩畫の顔料でざつと濡らした。

『さあ、かうして置けばまたいつでも本當に描ける。』

『あんたはん、これだけどすか。』葛城は繪の具を塗つた寫生帳をまた取り上げて眺めながら、物足らぬやうにいつた。

『そしておいて、また絹に大きく描くんだよ。』

『今描けまへんか。』

『今は描けない。そのうち描いてあげる。』

『はやう描いとくれやすな。……ほんなら何かほかのものを今描いとくれやすな。』

葛城は甘えて強請つた。

『描いてもいゝ。……が、お君さんその代りに濟まないが御褒美に一つ飲まして下さいな。』

『へえ、畏りました。』

『ちや何かあんだの羽織の裏にでも描いてあげようか。』

『羽織の裏で、あれ友禪どつせ。』

『ちや羽二重にでも描かう。』

さういつて春雪はお君に出入の呉服屋に電話をかけさして早速白羽二重を持つて来さすことにした。

『ほんなら私、その間にちよつと頭髮をなほします。姉さん、これ重うおつせ。姉さんほしているく我儘いうてえらい濟んまへんがちよつと道具かしくれやすな。』

『へえ、へえ。ぢつき持つて参じます。』

さういつてお君の立つてゆかうとするのを待たして、

『それからねえお君さん……どうだらう、今日はまた一つ春雨に閉ぢこもつて

しんみりと春吉さんの好い聲でもきかしてもらはうか。』

春雪はさういつて葛城の方を見た。

『えい、それよろしい。』葛城はうなづいた。

お君は畏つて下りていつた。そしてすぐまた鏡立てと櫛箱とを持つて上つてきて、

『葛城さん、あのお内から電話どす。』

『さうどつか。』と葛城はお君と一緒に下りていつた。

電話口に出ると屋形のお清の聲で、昨夜はあれから葛城がこちらへ来たあとまた度々松池からも木屋町からも電話がかゝつてお清や仲居頭のお文までが言ひ譯の仕様に困つて後には到頭姉さんまでが電話口に出てそこをえゝやうにいひ繕らうて置いたから、もし貰へたら今からでも貰うて戻つて一遍大阪のお客さんのところへも顔を出してもらへまへんやろかといふ口上である。

葛城は屋形の人達や松池のお女將はん達の當惑は察したけれど昨夜から機嫌をわるくしてゐる客のところへ直ぐゆくのはどうしても氣が進まなかつたし、また此方のお客がこれから歸へす筈もないと思つたから、何處までも病人が悪くつてとても歸つて來られないことにして、よくお清にいひ含めて電話を切つた。

葛城がさあらぬ體で靜に座敷に戻つて來ると、春雪は火鉢の傍に肱をたてゝ横に寝そべりながら春を流してゆく雨の音の中にうつとりと蕩けたやうになつてゐたが、

『何の用』と不安さうに訊ねた。

『何の用ちうこともおへんけど、ちよつと。』

『弟が悪いの。』

『大阪？』春雪は其方が氣にかゝつたが、それを先に訊ねるのも端なないと思つ

て自分を抑へたのである。

『ちがひます。もう大阪へ歸らりましたやろ。』葛城はまた根柢葉掘り問ひ糺されるので煩はしさにさういつた。

やがてお君の持つてきてくれた鏡の前に坐つて太い金元結を解いて大きな伊達兵庫の鬘を解いた。降る雨に襖も障子も閉切つた部屋の内がしつとりと生暖く潤んで、春らしい心地の中に葛城の濃い頭髮から立ち迷ふ柔かい香油の薫が媚びるやうに漾うてゐた。入れ毛を取つてしまつてやがて好ましい銀杏が彼女自身の手によつて巧みに結ばれた。

『あんた上手だなあ。』さつきから眼を離さず見てゐた春雪は横になつたまゝいつた。

『私、いつも自分で髪結ひますせ。』

『それは感心だ。』

『頭髮かて、みな自前どすもの。』

『へえ、そんなら全抱へてみて頭髮も自分でもつの。』

『自前でないのはお花にゆく着物だけどす。屋形にゐる時はいつも自分の着物を着てゐます。』

『全抱でそれはひどいねえ。』

『私、こして奉公してをつて自分で所帯を持つてると同じことよつせ。そやからたんとお金がかゝります。』

そこへお君が早速呉服屋からとゞけた白羽二重を持つて上つてきた。

『これでよろしおすか。ほて春吉さんちつき来やはります。……ほ、よう出来ました。あんたはん上手どすなあ。』お君は葛城の頭髮を眺めた。

『今いつてゐる處なんだ。商賣柄とも覺えない、いつも頭髮は自分で結ふんださうです。どうです。これなら落籍して宿の妻にしても所帯持ちはいゝでせう。』

『よかつた。』それを好機にお君は笑つて急しさうに立つていつた。

それと入れちがひに淨瑠璃の春吉が、大きな箱を持つた内の芋姆と一緒に入つてきた。

『今日は、よう降りますなあ。』

春雪の好みによつて春吉はいつもの通り「新の口」のはなと「三千歳」のさはりを二つばかりやると、一服して此度は葛城のお好みで「白石噺」を長く語つた。葛城は好きな中にも揚屋の段は今このわが身につまされて、いつもいつも悲しく聴くのであつた。年はまだ葛城よりも二つ若い二十であるが、春吉は聲が好いうへに藝に熱心で、それにすこしも色氣のないのが面白くつて春雪はまた葛城を知らぬ時分から折々こゝへ呼んで旅の憂さはらしに自分でも三味線をとたよりに、わたしの父さまかゝ様は京の六條珠數屋町などゝ唸つてゐた。

「……これこの廓へ身を賣つたを、思ひ返せば十二年、そなたは五つ子顔さへ見知ら

ず、と、様の御最期や、母様の死目にも、逢はぬといふ、悲しい不孝、果敢ないことがあらうかいの。かうしたことゝは露しらず、この妹は健なか知らぬ、と、様やかゝ様のお煩ひでもあらふなら、よもや知らしてたもらふもの。たよりのないを杖柱、首尾よふ年を勤めたら、國へ歸つてお二人に樂させまして、どうしてと。色や浮氣を嗜んで、勤大事といひなづけの殿御のことも、そなたのことも、戀し懐かし思ふもの、たのしみ暮した効もなふ。名乗り逢ふたは嬉しいが、悲しい話し聞く姉が、心を推してたもいのふ。と。……」

春吉が悲哀をこめた音調につれて濕やかに語りつゞける宮城野しのぶの姉妹が涙の物語にじつと聴き入つてゐる葛城の黒瞳がちの二重瞼は大きく潤んで長い睫毛にはいつしか露が光つてゐた。

その夜も葛城は小休みもない春雨に降り籠められて泊つた。

六

それから十日ばかりも過ぎて、京の春も漸う闌け、東山の青葉の奥からひゞいて来る鐘の音とゝもに薄ら寂しい夕暮れの風にさそはれて庭の櫻のほろ／＼と散りゆくやうな晩であつた。

その日も葛城は午から春雪の宿によせてもらうて久し振りにのんびりとした氣持ちになりながら、昨夜花見小路の近あさで多勢一座の陽氣なお座敷で飲めもせぬ酒を拳に負けて悪じひせられたせいで今日もまだ頭がふらつくやうな心地がするので、いつもの按摩を呼んでもらうて横になりながら療治をしてゐると。

『葛城さんお内からお使ひです。』といつてお君が上つてきた。

葛城は玄關まで降りていつて會ふと女衆のお清がわざ／＼迎へにきてゐて、

『あの今松池さんから電話として、ちよつとでもいゝさかい。今日はぜひともあんなはんに顔を出しとくれやすいうて来やりましたんどつせ。ほて内の姉さんが、あんたはんにそない云ふとくれやすいはりました。今日はぜひちよつとでもそちらを貰うて来るやうにいうたはりました。』

葛城は『さうどつかおほきに。』といつたまゝそこに立つてちよつと考へた。彼女の眞實の心はもう春雪の方に傾いてゐたけれど、この二三ヶ月妙に水つぽくなつてゐるものゝ、向は長い間世話になつたお客でもあるし、それに出てゐる以上はお茶屋に對する義理もあるし、この間の點茶の晩からあのまゝになつてゐる詫びも一應はいつておかねば方々へ申譯がないと思つたので、

『ほんならちよつと待つてとくれやす。』といつてそこにお清を待たしておいて春雪の部屋に上つてきた。

春雪は今に夕飯の仕度が出来てくるのを楽しみに待ちながら縁側に蒲團を持

ち出して静かな黄昏の風にさそはれて散りゆく庭の櫻を眺めてゐた。

葛城は春雪が快よく聽いてくれるかどうか、といふ不安やら、これから往くとしたら、向のお客やお茶屋で此の間のことを何といはれるであらうといふやうな色々の思ひに急かれて、ぼうつと上氣したやうになつてほんのり面を染めながら、

『あんたはんちよつと。』と妙に口ごもりながらいつて障子の小蔭に春雪をつれていつて、

『私、あんたはんにお願ひがあるのどつせ。』

『何を。』

と、春雪はさそはれるまゝに立つてゆきながら、もしや貰ひではあるまいかともう不安に驅られてさう訊ねた。

『えらい濟んまへんけど、これからちよつと内へ往してもらへまへんやろか。』

葛城が顔を赤くしてさういふと、春雪は相手の心の底まで見徹さうとするやうにじろくく女の顔を見まもりながら、

『大阪のお客さんのところ？』と不安さうに訊ねた。さういはれて葛城もさすがにお客での貰ひでない時まで全く嘘をいふ心はないので、

『いえ違ひます。神戸のお客さんです。』と綺麗にいつた。もし大阪のお客だと本當のことをいつたら、貰へないかも知れぬといふ懸念があつた。

『神戸のお客……深いお馴染。』

『そんなんと違ひます。たゞちよつと。……すぐ歸つてきます。』葛城はその後をいひ濁した。

『たゞちよつと。それからどうした。』

春雪は妙に薄笑ひしながら葛城の顔をまたぢつと見てゐたが、ぼうつと薄紅に染めなした女の顔に一生懸命なところが顯はれてゐるのを見てとると、それ

ほどそちらへゆきたがつてゐると思へば一層歸す心はしなかつたが、さうかといつて、あんまり悪留めをして勤めの邪魔をするのは、女の本心が果して何處まで自分に傾いてゐるか分らぬまでも、折角こちらに靡かうとしてゐるものを、それが爲に却つてあらぬ方へ外らせるやうなものである。さう思ひきめると彼は、

『すぐ歸るといつたつて、君達は藝者と違ひ、さうはゆかないだらう。』

『いえ、すぐ歸つてきます。これから汽車で神戸へおかへりやすのやから一時間か二時間したら私すぐかへつてきます。唯ちよつと顔さへ出しておけば後はもうどうなつたかて構ましまへんお客さんですから。』

『さうか、おきかへつて来るなら、ちよつと行つておいで。』春雪は快くいつた。

『ぢつき歸つてきます。八時か九時にはかへります。遅なつても十時か十一時には必らずかへります。あんたはん、……お腹空きましたか。……ちよとくらゐ

お腹すいても私戻つてくるまで御飯食べんと待つてとくれやす。私と一緒に食べますから。あんたはんそれまで按摩してもろてとくれやす。』

『十一時。それは遅いよ。お腹が空いて待つておられやしない。』春雪は、いかしともなげにいふ。

『ほんなら八時にかへります。あんたはん獨りで食べたらいきまへんえ、食べんと待つてとくれやす。』

『そんなら、いつておいで。』春雪はさういひつゝ片時も傍を離したくない可愛い娘を外に出してもするやうに、葛城の上氣した顔を見入りながら静つと指のさきで額にかゝつた小さい塵を拂つてやつた。

『ほんならいかしてもらひます。』

葛城は階子段を降りながらも同じことを何度も繰返してかへつて戻つた。

そして一旦屋形へ歸つていつもの通り早速俵で木屋町まで駆付けた。

『ほ、来やりました。』といふ仲居の聲に迎へられて玄關から屠所にひかれる小羊の思ひで歩きわづらひながら細い渡り廊下を傳うて一番奥の川添ひの離れ座敷の襖の小蔭まで進みよつた。内では松池のお女將はんの聲もしてゐる。彼女は思ひ切つて静かに微笑みながら入つてゆくと大阪の旦那は肥満した大きな體をどつかりと跌座をかいて脂切つた赤黒い顔をてらく光らせながら淨瑠璃の縫之助とお女將はんとを對手に酒を飲んでゐる。

『今日は。おかあはんおほきに。』葛城は鷹揚にいひながら好いところについて座についた。

葛城が、いよく来るといふ返事があつてから、もう今日は何もいはぬといふことにしてあつたと思はれて、お客もお女將はんもこの間のことなどはおくびにも出さず、彼女が来るのを待つてこれから多勢で宇治へゆかうといふ相談

が纏つてゐた。

『あんたそのまゝでもよろしいやろ。』お女將はんは葛城の方を向いてきいた。

『おかあはんさうどすけど宇治にゆくのだしたら。』と半分いひさして葛城は考へた。

此方へ来る以上は今あちらで約束したやうにさう易々と一時間や二時間で貰うて歸れる筈はないと自分でもそれを知つてゐながら實は吾れをも欺き向をも欺いてやつて來たのである。尤もこれまでは大阪から出て來る日は朝からでも花を付けておいて自分は急がしい體の都合で遅くからやつて來て一時間か二時間くらので直ぐその夜歸つてしまふことが多かつたのである。が、かう宇治ゆきの弾んでゐる場合にそれをいひ出したとて到底聽いてくれる道理はない。生中そんなことをいへばいふだけ悪く邪推されるばかりである。さう思つて返辭の仕様に迷惑うてゐると、

『あんた着替へるんやつたら、早う電話掛けて取寄さんことには遅なるえ。』お女將はんは催促した。

『おかあはん、私もうこのまゝでいきます。』

葛城の支度がそれでいゝことになると同勢四人そこから俵をつらねて七條の停車場に急がした。

奈良ゆきの汽車に乗つてからも葛城は後髪をひかれるやうな心地で、それとなく夕暮の風に吹かれながら窓から顔を斜にして遠く東山の方に眼をやるともろ薄黒く黄昏れてゆく青葉の奥から清水の高い舞臺に神々しい燈影が瞬きそめて、黒い人家の墓が段段上りに高く重り合つてゐる山裾の方は澱んだやうな暮靄に閉されてゐる。その中に今頃あの人は自分の歸つてくるのを待ちわびてゐやほるやろ。

愛宕の頂に長く残つてゐた夕榮えも鳥羽野のあたりでとつぷりと暮れて老阪

峠につゞく西山城の山々は夢のやうに淡蒼く夜の色に没してゐる。一望の緑の野はほの白い霧の闇に包れてしまつた。その中を列車ばかりが薄ぼけた燭燈を輝かしながら、駛せていつた。

汽車を降りてから一行はまた俚に揺られて宇治橋を渡り寒い川風に吹かれながら興聖寺の下から温泉まで辿りついた。

その夜二人きりになつてから、それまでは口を噤んでお女將はんなどの手前を遠慮して何もいはなかつた旦那はこの間の厭味をいつたりいろ／＼に手を變へて葛城の氣を引いて見たりした。

『ほんとにあるんなら、さつぱりとあるというてくれたらえゝやないか。私がその人に會うてよう話をして見て一生夫婦になつてもえゝ人やつたら私が仲に入つて一緒になれるやうに盡力してあげる。』

そんなことまでいつて優しく訊いてくれたけれど、葛城は唯温順しく笑つて、

『ほんまにそんな人あらしまへんたら。』といつてゐた。

『さうか、ほんならえゝけど。お前も、私が唯口ではかりいうてをつたのでは安心出来んやろから八月か九月までには五百圓だけでも渡しとくさかい。今年中には必ず落籍すやうにしてあげる。』

『どうぞおねがひいたします。』葛城は今までのゆきが、より上厭だともいひ切れないのでさういつて好い加減な挨拶をしてゐた。しかしさういふことはこれまでにもう度々聞かされてゐるのであつた。

翌日になつたら歸ることゝ思つてゐたが、昨夜が遅かつたので一同が眼を覺ましたのは彼れ此れ一時に近かつた。それからまた船を仕立てさせて酒や肴を積込んで渦巻き流れる紺碧の急流を米かしの瀬までも溯つたりして、そこを引揚げたのは向河岸の花屋敷に若葉がくれの明るい灯影が瞬きそめる頃であつた。その夜はまた木屋町で縫之助の三味線を聴いたりして夜を更かしたが、旦

那はいつになつても歸る様子は見えなかつた。この間のことがあつたので意地になつてゐるのであつた。こちらまけない氣になつて歸りたさうな顔は少しも見えないやうにして、

『あんたはんがえよとおひやすまで、いつまでよも此處にゐます。』

『よういうた。ほんとにゐるか。』

飲み出すといくらでも飲める旦那は昨日から酔ひつゞけの顔できつと葛城の方を見ながらいつた。

『えよ、ゐますとも。何日でもあなたの傍においとくれやす。えらいお邪魔どすやうけど。……そのうち奥さんや新町の顔が見たうなりますやろ。』仕舞を低聲で早口にいつた。

『何やい。なんいうた。もう一遍いうて見い。』

旦那は好い機嫌になりながら問うた。

『あゝ聞かれいでよかつた。』葛城は笑つてゐた。

『なんやい。』

けれども彼女はさうしてゐる間も病人のこと、あのまゝになつてゐる下河原のことが始終氣にかゝつてゐたが、それは少しも顔には見せなかつた。病人の方は出先が分つてゐるからもし急に變つたことでもあれば屋形から知らしてくるからその方は却つて安心してゐるけれども、下河原のことは濟まないと思つてゐた。

七

四月は末になつてもまだ咲き残つてゐた智恩院の櫻花さへ二三日つゞいた春雨にすつかり散りつくしてしまふと、やがて蒸し薫るやうな青葉にもう暑過ぎるやうな惱ましい日が照つてきた。

梅雄は物憂いゆく春の日をいつまでたつても思ふやうに拂々しくない病の床に寝飽きて時々疝癪を起しては母親を困らすやうなことがあつた。母のおつねはそんな時そばについてゐて獨りで泣かされた。そして母は娘を子は姉の見舞うてくれるのを待ちこがれて夜々を明かした。

『お母はん、姉さんはどないしたんやろなあ。今日でもう四日になるのに姉さんちよつとも来とくれやへんなあ。』この頃になつてまためつきり衰弱の加つてきた梅雄は焦れつたさうにさういつて姉の姿を戀しがつた。

『今お清どんの話ではまた大阪のお客さんやちうからこない長うなつてゐるのやろ。今日はもうかへるやろから、歸つたらちよつとでも来とくれるやうに頼んどいたさかい。急かんと待つとゐやす。』

母はさういつて病人の氣を靜める様にいつたが、先刻お清がこんな物をこしらへしましたからお母はんお上りやしとくれやすといつて屋形から五もくを持

つて来てくれたときこの間點茶の時行かなんだので、それでえらいこてくいてうてこんな長引張つとゐやすのどす。といつてゐたことを思つてゐた。今まで長い間世話になつてゐたことを思へばそれを怨むことも出来なかつた。梅雄も大阪のお客のことは知つてゐた。姉や母の話にも大阪では船場の大きな寶石商で市の公職をも勤めてゐると聞いてゐる。京都からめつたに外へ足を踏み出したことのない母も一度大阪へ見物にいつたついでにかねて聞いてゐる旦那家の前を通つて餘處ながら大きな店がまへを見て来て驚いてゐた。

けれども梅雄にはそれが不満であつた。父には早く死なれ、今の姉よりもまだ美しいといはれた上の姉も死んだあとでは一家を脊負つて立つべき男子は自分である。自から招かぬ禍からかくまで淺猿しく零落した境遇を挽回するのは自分一人の雙肩にかゝつてゐるのである。さうしてそれを救ふ方法といへば自分の苦學の他にはない。自分は學問を以つてどうぞして、一家の悲運を救ひ姉

の恥辱を雪がねばならぬ。それが目前の急務である。その若い美しい姉は彼にとつては恰も戀人のやうなものであつた。その戀人の姉は僅かばかりの金の爲に體の自由を縛られて朝夕多くの人の汚れたる欲望の犠牲になつてゐるのである。大阪のお客といふのは悪い人ではないさうだが、いつか姉と一緒に藝妓や舞妓を多勢連れて四條の通りを歩いてゐるのを見たことがあつた。洋服を着ていかつい髯を生した肥つた男であつた。梅雄は初めてそれを知つた時あれがいつも聞いてゐるわが姉の旦那かと思ふとその赤黒く肥つてゐるのが恰ど岩見武勇傳の講談で讀んだ狝であつて、纖弱い色の白い優しい姉がその狝に人身御供に上げられた生贄のやうな感じがして自分は少しも早く岩見重太郎のやうなものになつて姉の恥辱や老いたる母の悲みを救はねばならぬと思つたのである。かうしてたつた一人の弟が重い病の床についてゐても姉はたまに深切なお客に樂花をつけてもらふか或は自分で花をつけねば急しい體を夜をこめて自分の

傍にゆつくり來てゐてくれることも出来ないのだ。たゞ人の好いばかりの母親には何をいつたつて分らぬので梅雄は病の重なるにつれて一層昂奮してくる心持に襲はれながら凝乎と睨むやうに天井を見詰めてゐた。

そんなことを思ひながら四五日顔を見せぬ姉の姿を頻りに戀してゐると表情子のあく音がして誰れか訪ねて來た氣配がした。

『お母はん誰れか來てゐるえ。』

敏く耳についたまゝもしや空耳ではないかと暫く黙つてゐた梅雄はそこに坐つてゐる母親にいつた。

母親がすぐ立つてゆくとそれと一緒に入つて來たのは梅雄の好きな春雪であつた。東京にいつて苦學をしたいとあけくれ口癖のやうにいつてゐる梅雄には東京の人と聞くさへ懐かしかつた。その東京の人で繪をかく人がこの頃姉をひいきにしてくれてこゝへも二三度見舞ひにきてくれて、來る度に東京には學校

の數多いことや京や大阪と違つて學生がみな活潑なことや本屋の多いことやい
ろんな梅雄の胸をそゝるやうな話をして聞かして今に精出して早く病氣が癒つ
たら東京に連れてかへつて學校にやつてやるといつて元氣をつけてくれてゐる
のである。

『どうぞこれをおひきやしとくれやす。』と母親は蒲團を春雪にすゝめながら、
『丁度いゝとこどした。今屋形から女衆が来て歸つたばかりのことですさかい、
もう誰れも来いしまへん。』といつてまた立つていつて入口の方に氣を附けてき
た。

『お客さんにこして来てもらひますのを屋形できつう嫌らはゝりますので、私
の方ではほんまにお氣の毒に思ひますのどすけど、どうぞわるうとらんとおい
とくれやす。』

『いえ、そんなことは構ひません。屋形でもいろく疑ふんでせうよ。』

『えゝそない思つてはりますのどす。あの娘も滅多なお客さんに吾が家のこと
など話さしまへんけど、いつかも一遍そんなことでしくじつたことがおすので、
それから屋形でもきつう氣を付けはりますのどす。』正直な母親は凡てのものに
おづ／＼したやうにしていふ。

『屋形では葛城さんが自分の家へ馴染の客でも連れこんできて影日向でもする
やうに思つてゐるんですか。』春雪は煙草に火をつけながら笑つていつた。

『まあ、そんなこともないやろけど、そんなことがあつては葛城さんのために
よくないよつて云うて姉さんがそない云はゝりますのどす。』

『だけど姉さんといふのは大變可愛がつてくれてゐるといふぢやありません
か。』

『そらよう氣を付けて可愛がつてくれはります。またあの娘が平生勤めねばな
らんとところはよう勤めてゐますさかい、屋形でもそれはよう知つてくれてはり

ます。』

『どうかね、今日は。』春雪は梅雄の方を見ながら微笑んだ。

『え、難有うぞんじます。』梅雄は衰弱した體を努めるやうにして強ひて顔に笑を出さうとした。

春雪は傍に置いてみた小さい包みの中から罐詰をとり出しながら、

『これは先刻東京からとゞいたんだが榮太樓の梅干飴といつて病人が食べても障らないものです。も一つの方は甘納豆です。』さういつて罐をあけて、

『一つ摘んで御覧。格別甘くもないけれど。』

『まあさうですか、毎度結構なものを戴きまして。』母親は茶を入れて出しながら禮をいつた。

春雪はこの間葛城がちよつといつて來るといつて歸つたまゝ、その夜は十一時が十二時になつても一時になつても遂に姿を見せなかつたのでその夜はいろん

な不愉快な思ひに苛まされながら惱ましい一夜を殆ど寝ないで明して、翌日になつたら何とか挨拶をするであらうと思つてゐたが晩まで待つても何の音沙汰もないのでそれからそれへと取留めもない嫉妬や疑惑に包まれながら三四日は描きさしの繪絹を仕舞つたまゝに放棄してゆく春の日を心を空に惱みつけてゐたが、それもまちあぐねて弟を見舞ひかたぐそれとなし葛城の動靜を訊きに母親のところへ訪ねて來たのである。

『どうです。やつぱし毎日姉さんは見舞ひに來ますか。』

『丁ど今二人でその事をいうてゐましたとこです。この間から四五日お客さんにつれられて宇治とか大津とかへいたいて、あんたはんちよつとも屋形へも歸つてきいしまへんさうです。屋形へさへ戻つてくれればちよつとでも顔を見せんことはないのですけど、この兒がもう今日で五日も顔を見いへんもんどすからえらうあの娘を懐かしがりましたで、「姉さんはどないしたんやろ」といつてなあ、

今もそのことを親子して愚痴をいうてましたとことです。』

母親は鼻聲になりながらいつて、梅雄が暖かさに踏み脱いだ蒲團の裾をなほした。

『さうですか、實はこの間私のところへ来てゐて、屋形から迎へに来て、ちよつと行つて来るからといつたきり何の挨拶もないのですが。』といつて春雪はそのことを話した。

『まあ、さうどしたか、ほんまにえらい濟まんこととす。あのお客さんいつもすぐおかへりやすのに、此度はえらい長、お母はんお客さんも葛城さんも兩方で意地になつてゐるのやいうて、昨日ちよつと屋形へゆきましたら屋形の姉さんもそない云うてはりました。』

『あのお客さんといふのは、どんなお客さんです。』

『やつぱり大阪のお客さんです。あの娘がもう長いこと世話になつてゐるお客

さんどすさかい、無理をいうてまた失敗つたらようない思つて、大方あの娘も心では何ぼ歸りたうてもそんなことを口に出さんと忍耐してゐますのどすやろ。』

母親はそんなことを春雪の耳に入れて善いか悪いかの考もなさようである。

『あゝ、大阪のお客さんですか。私のところでは神戸のお客さんだとかいつてゐた。』

春雪はさういひながら、心の中では葛城が自分を神戸のお客といつて騙していつたことにまたいろくな疑ひを挟んで不安の思ひに心が迷うてゐた。

『この間都踊の點茶のときあの娘が行かなんだのでそれでえらいごてくゝいうてゐるのやいうて今先女衆がきてそない云うてゐました。』

『あゝさうですか、あの時は私のところへ来てくれたのです。』

『そやさうにおす。それも女衆がさういうてゐました。』

『それにしてもこんな病人があるのだから、さういつたら歸してくれないこともないでせうがねえ。』

春雪はさういひながらそつと梅雄の方を見ると、黙つて二人の話を聴いてゐる病兒の興奮した眼には、しとどに露がとまとつて、仰向きに寝てゐる病み疲れた頬には、ほろりほろりと涙のしづくが流れ落ちてゐる。

春雪はそれを静と見まもりながら自分もともにやる瀬ない感慨に迫られて、込上げてくる無念の涙をせきかねてゐた。

『そんなに思つてゐるほどなら、いつそ自由な身にしてくれたらよさうなものですがなあ。』

『此方ではそない思ひますのどすけど、それももう長いこときいてゐますので、あの娘もこの頃ではあてにしてゐいしまへんのどす。去年どしたか、も一人大阪のお客さんで落籍してちんとしてやるいうて深切にいうておくれやしたお方

がおしたのどすけど、今のお客さんの方が先やさかい、その方に黙つてそんなことをしてもらては濟まんからいうてあの娘が相談しましたらもうちよつと待つてをれ、私の方で落籍してやるからいは、つたきりそのまゝになつてゐますのどす。そのお客さんもさつぱりした好え人どすけどまだ親達があつたり、奥様も妾もあるのどすから、此方もあんまり氣が進まんのだす。』母親は梅雄の脚の方を採みながら涙まじりにそれからそれへと問はず語りをした。

『その人が、どうもしてくれなければ、そんなに忙がしい妓だから、ほかにさうしてくれる人がまだいくらもありさうなものですがああ。』春雪は半ば獨語のやうにいつた。

『屋形の姉さんもそない云うてくれはりますのどす。葛城さんはえらい仕合が遅い、いうて。それで姉さんのいは、りますのには、この先まだ年期が四年にのびてるさかい、その年期があくのがあの娘が二十六の八月になりますよつて

それにまだ休んだり病院に入つたりしてひげ日を入れると丁ど二十六の年の十二月まで、借金が済むことになりすさかい。ほしたらあと自前二三年勤めると千や千五百のお錢は樂に残せるから、そして一人妓を抱へて自分も働けば三十までには大分残せる。大抵三十までは體はめつた落ちるもんやない。ほしたら内でも黙つてたゞ見ては居らんさかい、まあお母はんもあんまり心配せんと氣長う辛抱してゐやはつたらえ。それでもそのうちまた借金でも済してやらういふお客さんがあつたら、内でもよう訊き糺してこれならあの人が一生涯を任してもえ、といふ堅い人やつたら、私の方でもまた考へてゐることもあるよつて、お母はんがたの都合の悪いやうにはせんさかい。そない云うて深切にいうてくれてはりますのどす。あの娘が平常壯健で何事もない時分にはまたよう體を働かしてゐますさかい、多勢抱へてゐる妓の中で姉さんもあの娘にいつち目をかけてくれてはりますのどす。』

母親は先の長い話をしながら指折り數へて娘の年期のあく日を待つてゐた。春雪は黙つてそれを聞きながら、頼りにならぬことをたよりにしてゐる老母の無智なる正直を哀れむやうな眼で見つてゐた。そして危かしさうに顔を擧めるやうにして、

『そんな、あなた、あの纖弱い體でこの先長くそんなことをしてゐてどうなるものですか。』

さういふ春雪の心には、葛城にも早晚弟と同じやうな悲しみの日の襲ひ來るのをまざくと見てゐるのであつた。

『この兒もそれを毎日いひ暮してゐますのどす。姉さんがいつまでもあんなことをしてゐてはどもならんいうて。それを苦にしたのが原因でこないに病が餘計重うなつたのどす。あの娘もあの娘どすけど、どうぞしてまあこの兒が早うよくなつてくれまへんことには、私自分でも病になりさうどす。』

『まあ、まあ。そんなに氣を落さん方がいゝです。それにしても姉さんが早くかへつてくれればいゝがなあ。』

春雪は梅雄の方を向いていつた。が、病人は疲れていつの間にかすやくと假睡んでゐるのか返辭がない。

『姉一人弟一人やもんどすさかい、そら仲よろして互に大事にし合うてくれますので、それで私もえらい悦んでゐましたのどす。五年前連れ合ひが死なはりましてからはもうこの二人を頼りに先を樂しみにしてゐましたのにどうしてこない悪い病に罹つたことやろいうてゐますのや。』

母親はいぢらしさに堪へぬやうな聲でいふ。

『それは尤もです。病人がそんなに慕うてゐるものを、いくら勤めとはいひながら少しどころかならないものですかなあ。』

『なんぼ何でもあのお客さんも弟の悪いことはよう知つてはるのどすよつて、』

もう歸してくれはりますやろ。あんたはんにえらい濟まんことよした。まあさういふ具合どすさかい、どうぞ悪う思はんとおいとくれやしとくれやす。あの娘が來ましたら私からもよう云ふときますさかい。』

『いえ、なに。私の方は。』

さういつて春雪は、また誰れも來ぬ間にといつて、そこくそこにそこを出た。

八

その春はいつまでも陽氣が不順であつたせゐか病人にはひどく障つて、梅雄の病は俄に變調を呈してきた。

大阪のお客はそれからまだ三四日も花をあけてくれなかつた。もし急變でもあればすぐに知らするといふことになつてゐたので、まさかまだ今日や明日にそんなことはないだらうと安心して、木屋町の居つゞけにも飽きて此度はまた

多勢で大阪へ引返へして芝居を見にいつたり文樂座をきゝにいつたりしてゐる間に病勢はどつと重つてきた。屋形からは早速葛城の入つてゐる松池に女衆のお清を駆けつけさせて、そこから心當りと思ふ大阪の出先へ方々電話を掛けて見たが何處にいつてゐるか、何度かけて見ても一向行つてゐる先がわからなかつた。

屋形の方でもひどく心配して、姉さんまでも来てくれて徹宵病人の傍にいつてもともに母親に力を添へてくれたが、その効もなくその夜の早曉に、息を引取る際までも「姉さんはまだか、姉さんはまだか。」と、そればかりをいひつゞけにいつて母の手を持ちそへたまゝ眠るやうに眼を瞑つた。

—葛城太夫了—

—附 録—

流 れ

『旦那はん、大阪から田川さんといふ方から電話がかゝつてゐます。』
本店の子守が、枕頭に来て、息をはずませながらいつたので眞島は目を覺ま

した。
大阪から電話。田川といふ名前の電話。といふ報知を聴いて、毎朝不快な氣
持ちで眼を覺ます習癖になつてゐる眞島は、今朝は譬へやうのない嬉しい心持
ちで目を覺ましたのである。

『あゝ、さう！』といひながら。急いで跳起きて、帯を締めるのももどかしさ
うに本店に駆け出した。

眞島の泊つてゐるのは、別荘になつてゐて、本店は、二丁ばかりも離れた家
込みの方にあつた。其處の宿では電話は本店の方に一つ架設してあるばかりで
あるから、遠距離から電話が掛つて來る時には、本店から別荘まで知らして來
て、それからまた駆け出して行くのだから、まごごする間に一通話の時間は

空しく経過して了ふのであつた。

彼れは急々として電話室に籠つた。

『あゝ、もしく私、眞島。』

『もしくあなた眞島さんですか、私、大阪ですが、只今千代奴さんが出られ
ますから。』いつもの虎どんの聲である。

『もしく、もしく、あなた眞島さん、私、田川。』お夏の少し噎れた緩い口
調である。千代奴の本名はお夏といつてゐた。眞島は殊更にその本名を呼んで
ゐた。眞島は、この地に來てから、その聲をせめて電話で聴くのを楽しみにし
てゐるのであつた。

『………先日はお手紙をありがたう。お金も確かに受取りました。私、今日行
きませうか。あなたの御都合は何う？』

『来たなら好きさ。私の方では何時だつて差支へないのだが、お前の方であんまり遅くなつては寒くなつてつまらないから、同じ来るなら早い方が好いと思つたから、あゝいつてやつたのだ。』

『でも今日行つたら、二十八日の朝は早く歸らなきやならなくつてよ。お約束があるから。』

『そんなら二十七日の晩に歸つたつていゝぢやないか。今晚と明日と二た晩泊つて。』

『それでもあなた好くつて？』

『仕様がなないぢやないか。』

『ぢや、今日行きます。……のりまきを買つて行きませうか。』

『何を？』眞島にはよく聞き取れなかつた。

『のりまきを買つて行きませうか。といふんですよ。』少し大きな聲を出した。

『あゝ、買つておいで。』

『あなた、随分つんぼねえ。……ぢや行きますから、待つてゝ頂戴！』

それで電話は切れた。

眞島は、この秋季から東京のさる新聞に小説を書かねばならぬことになつてゐた。長い間文學などに携はつてゐても、之れまで捗々しい創作をしてゐないので、此度その話しが定ると、彼れはその好機を逸しないで、熱心に筆を執つて見たかつた。

で、その事を気にしながらも、九月の初旬にこの有馬に來ると直ぐお夏に手紙を出して、少しも早く遊びに來るやうに勧めてやつた。

『夏季は身體が弱るから何處かへ連れて行つて頂戴！ 私半分持つから……』と、七月頃から、さういつてゐたのであるが、全抱への、自由の利かぬ身體である上に、眞島の方でも何時も餘裕のない生活をしてゐた。眞島はあくせく思

ひながら、暑い二た月の間は遂々何處へも行かずに大阪の郊外でつまらなく夏を過ぎて了つた。九月になると、東京の方の仕事の期日が段々切迫して来たので逃げるやうにして有馬に來た。夏の客の退散した後の有馬は閑靜で、始終あわたしい氣分である眞島も流石に其處では氣が落着けさうでもあるし、九月になつたら多少東京の方から入る當ての金もあるので、お夏にさういつてやつたのであつた。

眞島が東京の生活に飽いて京阪に放浪の旅に出掛けてから、もう一年になる。相當な年配になつてゐても、妻子があるのでもなく、また日々出勤せねばならぬ定職を持つてゐるのでもない彼は、何處にゐても差支へないのであるが、京阪にも大分見飽いてゐた。その見飽いた京阪にまだ滞在してゐるのは、去年の秋の末頃からつい馴染みになつたお夏を忘れかねてゐるからであつた。そのお夏とも八月の末に逢つたつきり丁度一と月逢はないのである。

で、電話が掛つてから、眞島は、靜としてゐられないほど嬉しくつてそれはそれはしてゐた。

何時の汽車で來るだらう？　これまで、手紙でも、來る時には、遅くつて十二時四十分の大阪發でなければ、その次の三時五分になると、此方のステーションに來て四時五十四分だから、其處から三里の緩い勾配の道路を俾にゆられて上つて來るのでは、有馬に着く時分には、もう暗くなつてしまふ。自動車で來れば、俾で三時間近くもかゝる處を唯三十分で來られる。けれども自動車は初めて乗る女には、もし眩暈でもするやうなことがあつてはいけない。でも乗つても大丈夫のやうであつたら自動車の方が早くつていゝ。さういふことを、細かに囁んでくゝめるやうに書いてやつてあるのであつた。先刻も電話でまたその事を繰返して置いた。

それから三時間ばかり眞島は耐へ性もなく手繰り寄せたいやうな心持で時間

のたつのを待った。やがてもうそろ／＼着く時分だらうと思ふと彼は楽しみに胸をそゝられながら自動車の停留する場處の方に出て行つた。

山地の秋はもう更けて、眼に入る物の色にも、肌に触る空氣の感じにも、眞島が此處に來た當座の、漸う夏季を過ぎたばかりの初秋に見るやうな清新な気分にはなり得られなかつた。彼れは、もう少し早くその美しい初秋の山にお夏と時を過すことの出来なかつたのを残念に思つた。で、何となく物足りない寂しい心持ちを感じながら、長く延びた街道に添うて、自動車の來る方に歩いて行つた。

平坦な一筋道を自動車は砂塵を巻きあげて遠くから疾走して來た。近寄つて來る車上の乗客を、眞島は眼を皿のやうにして見張つたが、待つ人の姿はなかつた。

眞島は耐らなくなつた。ちや俤で來るのかも知れぬ。併し俤で來るとすれば

まだ二時間を空しく待たねばならぬ。彼れはその間の時間の経過するのをもどかしがつた。さうして理由もなく其處らを彷徨して無駄に時を立てやうと焦つた。三田驛に通ふ街道を一里ばかり下の村まで歩いて行つた。さうしてお夏の姿を俤の上に想像に描きながら、小山の鼻の曲り角になつてゐる處で認めようとした。

けれども寂れた街道には俤一臺も來なかつた。彼れはたゞうら悲しい心持ちになつて空しく引返へして來た。もう日は暮れて山の上の家々には燈が瞬き始めた。

今日晩には一緒に夕飯が食べられると思つてゐたのに、遅い汽車で來て、あつと俤で來るとして見ても、もう今まで來ないのでは、今日はいよいよ來ないのだ。さう定つてしまふと、眞島は耐へられない失望の感じにがっかりして、旅館に歸ると、廊下にゐた女中に

『夕飯の支度が出来てゐるなら、持つて来ておくれ!』と命じた。

さうして何か溜つてゐる胸に飯を自暴に詰め込んだ。気がむらくして来た。何か當りつける處があるなら、當りつけるのだが、その當りつける處のないのが、彼れにはいひやうのない空虚の感じを與へた。

さうして箸を置いた處へ次の間にこそくと人の氣配がして、やがて靜かに襖を明けて、今日は、本店の方の番になつてゐる女中のお竹が恭しさに小包みが高く持つて先きに立ちながら、

『此方でございます。』と、誰れかを案内するやうな口をきいた。さうして眞島の方に向つて『お出でになりました。』と愛相笑ひをしながらいつた。

お竹の背後に姿を忍ばすものゝやうに人影が動いて、

『ほゝ』と笑つた。

お竹も慎しげに笑つた。眞島はそれと氣が附くとわざと澄した顔をしてゐた。

焦れくする心持ちを、澄ました顔に押包むのが彼れにはその時勢一杯であつた。それでも嬉しくつて耐らないので、

『來たの? 今御飯を食べてしまつた處だ。あんまり遅いから、もう來ないかと思つてゐた。』

その間に、女は入つて火鉢の向側に坐つた。

『どうして其様なに遅くなつたの。だから彼様なによくいつて置いたぢやないか。自動車に何故乗つて來なかつたの。俾で來たからそんなに遅くなつたんだ……』眞島は疊み掛けて叱り始めた。

お夏は女衆の手前を恥しさに、

『まあ、そんなに來い早々怒るもんぢやないわ。』笑ふ口元を小さくつぼめながら、眞島を制した。

お竹は笑ひながら、手荷物を其處に置き、火鉢の火を直して、退りながら、

襖の處に行つて畏まつて、

『お夕飯は、どういたしませう？』

『……さあ、私は濟んだんだが、何が好いかな……鶏がよからう、鶏にして下さい。』真島は、それを命じて置いて、また女の來やうの遅いのを責めた。

『まあ、來い早々其様なことをいふのはお止しなさい。……お、寒かつた。あ、あ、好い物がある。それを下さい。お腹がすいた。』

男の背後にはバナ、が散かつてゐた。男は黙つてそれを取上げて皮を剥いて女の口元に差出してやつた。

『寒いわけさ。お腹もすくさ。だから早く來るやうに電話でも、さういつたぢやないか。』

女は男の手に持つたバナ、をひと口食つて、

『あれから電話を掛けてから、お湯に行つて頭髮を洗つて、結つたりしてゐる

内に十二時四十分の間に合なくなつたの。』

『ぢや此方のステーションから自動車で來ればよかつた。私は、如何なに心配したかしのやしない。俵ぢや此様なに遅くなるから、お前が心細いだらうと思つて……寒かつたらう。』

『え、寒かつたわ。お、寒い。』

『寒いさ……これからお湯に行かう。い、お湯だよ。』

真島は、有馬に來た始めから、少しも早く女を呼んで、好い温泉に入れて、喜ぶ女を見たかつたのである。彼は肉慾の爲め、戀愛の爲に女を愛するといふよりも、唯女が可憐で堪らないのである。彼は、此の可憐なる者を強ひて求め得て、その力によつて、自分の生活に飽いた心を引立てやうとさへ思つてゐるのである。

さういつて温泉に行くことを急いだ。

『まあお待ちなさい。もう幾許遅くなつたつて構はない。煙草を一つ吸つてから。』

眞島は待遠しさうに、女の顔形を見守りながら、

『お前どうして彼方の袴の方の羽織を着て来なかつたの。その単衣羽織はもう汚れてゐるぢやないか、もう有馬ぢや袴を着てゐるよ。』

『さうあなたのやうにいつたつて、大阪ぢやまだ來月にならにや袴を着やしない。それに自家ぢや離れた處の土藏に仕舞つてあるから、一寸出して貰ふといふ譯に行きやしない。』

眞島は、女が着て來た衣類のことまで氣にしてゐた。それは彼れが女を愛するの餘りで恰ど母親が娘の着物のことに世話を焼くのと同じ心であつた。

『兎に角湯に行つて温まらう。』またしても湯を急いで立つた。

やがて二人は、石段ばかりで出來てゐる細い路地のやうな道を足で探りなが

ら降りて行つた。眞島は先きに立つて、

『氣を附けないと危ないよ。……手をお出し。』手を取つて降りて行つた。

『遂々奥さんを連れて來たよ。』眞島は湯番をしてゐる顔馴染のおかみさんに笑談をいつた。眞島が屢々一人で高等温泉に來るのでいつも、

『あなた、奥さんと二人でないといつませんわ。』と、おかみさんはいつてゐた。眞島も入れ込みの温泉と違つて、毎時も浴槽の縁を波々と流れ落ちてゐる湯の中に一人きりの體を氣樂に浸しながら、一人で入つてゐるのを勿體ないやうにもまた物足らなくも思ふのであつた。

おかみさんは、それを見て、上り湯に新しく炭をついでくれたり、其處らを雑巾で拭いたりして、『ごゆつくり。』といつて扉を閉めて出て行つた。

眞島は、急いで着物を脱いで、湯殿に下りるが早いか浴槽の中につぶくんと身を沈めた。

『お、好い湯だ!! 早くお入り。』
女も湯殿に下りて来た。

『真個だ。あゝ、好いわねえ!!』お夏は顔中に笑ひを表はした。

『好いだらう。だから、あんなに遠からお出でくといつてみたんぢやないか。お前と斯うして一緒に入りたかつたんだよ。……途中で寒かつたらう。もつともつとずうつと頸まで洗めてよく暖まらないといけない。』真島は、両手で女の肩先を押へて湯の中に深く洗めた。

『誰も来やしなくつて?』

『誰も来やしないよ。買ひ切りになつてゐるんだもの。鏡を下さうと思へば下されるやうになつてゐるんだ。……』

『よく暖まつて行きませうねえ。』

『あゝ、長く入つて行かう。もう落着いたもんだ、真個に今日は待ち勞れたよ。』

真島は、長い間の待ち遠しさやら寂しさやらを、この一時に取返したやうに體中が生活の歡びに充滿たやうに感じた。

『今夜こそお互に按摩のもみつこをしませうねえ。』

『あゝ。それよりお前を流してやらう。』

『あゝ、流して頂戴。わたしも、あなたを流して上げるわ。……今晚此處で長く遊んで行きませう。』

『温泉だから何度も上つては入ると好いんだよ。』

湯に暖められた女の白い肌が薄く紅を潮して来た。多い頭髮が黒く濡れて襟脚から肩の上に恰度烏蛇を見たやうに幾筋となく這ひ亂れた。

『さあ、それに腰をおかけ。流すから。』真島は女の背後に廻つて、石鹼を手に塗り取つて、それをぬるくと女の肌一面に塗つた。さうして手拭を絞つて擦つた。頭髮を掻き上げて頸筋から乳の邊まで念を入れて磨いた。手拭を疊ん

で肩に載せて、三助がするやうに、叩いて、その後へ温い湯を、どつさり流し掛けた。

『お、好い心持ちだ。どうも難有う。さあ、こんだアあなたのを流して上げませう。』

『あ、まあ一遍入つて温まつてから。』男は湯に漬りながら、仰向きに脚を伸して、浴槽の縁に頭を載せた。さうして心地よさうに女のすることを見てゐる。

女は、小さく疊んだ手拭に白い泡が垂れるほど石鹼を塗つて、一心不乱に顔から襟頭のあたりを磨いてゐる。

『お前は湯が長いんだつたねえ。』

『え、毎時も二時間かゝるの。お湯屋で屢く、千代奴はんお辨當持つて來ませうか。』といふわ。』

『今晚こそいくら長く入つても構はない。』

女は自分で暫らく氣の済むやうに磨き終ると、

『さあ、一つ入つて……』といひながら湯に漬つた。

磨き立てた顔が湯氣の中に、電燈の光を浴びて艶々と薄紅に輝いてゐる。眞島にはこの女の露邪氣な心のないのが何よりも氣に入つてゐるのである。女は悪毒氣のなさうな口を緩く開いて、深く湯の中に沈みながら、手拭で湯をしやくつては、顔に流しかけてゐる。さもく活き効のある、名状し難い刹那の快感に五體を委ねてゐるものゝやうである。

『寒かつたのが暖まつたらう。』

『暖まつてよ。ほんとに好いわねえ。』

男も流して貰つて、二人はゆつくり温泉から出て戻つた。九月の末の温泉町の夜は寂し過るほど静かである。其處らに立ち並んだ湯宿の大きな別荘にもも

うあまり浴客はないと思はれて、静寂とした二階三階の部室々々には電燈の光が空しく冴えて見えるばかりである。男女は、その寂しい夜を却つて自分達獨りの世界のやうに思ひ做しながら険しい石段の道を、また手を引いて探りく歩いた。

歸つて來ると、もう鳥を煮る支度がすつかり出來てゐて、炭火がぼつ／＼青い火焰をあげて熾つてゐる。松茸の新鮮な香氣が、そこそなく部屋の中に漾つてゐる。

眞島は、女から濡れ手拭を受取つて、自分のと一緒に例の處に始末して置いて、火鉢の傍に寛坐ぎながら、

『どうだ？ 酒をいはうか。』二人とも酒はあまり飲けないのである。

『え、いつても可いわねえ。だけど一寸手を拍くのを待つて頂戴。私、一寸顔を造るから。』

女は、先刻湯に立つて行く時に、男から鏡臺も此處にあるよ。』と教へられたその鏡臺を違ひ棚から取り下して、何よりも先きに顔の粉飾に掛つた。羽二重の小さい化粧袋を取り出して、鏡の表を睨むやうな眼附をしながら手早く眉黛を刷いて、薄り白粉を彩つた。

『さあ、もうこれで好いの。』

道具を形附けて火鉢の向側に寄つて、

『わたい煮るわ。』といつて鳥を煮かゝつたが、『あゝ、忘れてゐた海苔巻きを持つて來たのを。』といつて小包みの中からそれを取出した。

『あなた、お上んなさい。今日虎どんに買つて來て貰つたの。』

二人とも海苔巻きが好きであつた。

『あなた、木の葉が好きだから、木の葉を持つて來ようと思つたけれど、木の葉は持つて來られなかつた。』

温順おとなしい女をんなだけれど、時々とき罪つみのない笑談せうだんをよくいつた。

『木の葉このはは持つて来こられやしない。』

落着おちついた長い夕飯ゆふはんが漸やうやく済すむと、

『あなた、手紙てがみを書いて頂戴ちやうたい。津つの國屋くにやのおかあちやんと虎とらどんとに手紙てがみを遣やつて置おかないといけない。』

二人ふたりは、お茶屋ちややの主婦おかみに、よく、千代奴ちよつこを一人ひとりで寄越よこしてくれたの、無事ぶじに着ついて、今夜こんやは他ほかから貰もらひの掛かつて来くるうるさいこともなく、今いま二人ふたり一緒いっしょに湯ゆに入いつて来きた處ところだの。今夜こんやこそは二人ふたりきり夫婦ふうふらしく寝ねるだの。といふやうな笑談せうだんまじりに、三晩さんばん泊とまつて行く、二十八日にじゅうはちにちは、朝早あさはやく歸かへる。花はなの事ことは千代奴ちよつこが歸かへつてから委細話わさいはなしをするといふやうな用事ようじを相談さうだんしいく書かいた。そこへ

『もうお床とこをのべませうか。』若い女衆わかをんごしが襦ふすまを明あけてしとやかに伺うかつた。

『あゝ、のべて貰もらひませう。』

翌朝あくるあさは、二人ふたりとも七時頃しちじごろに一度目どめを覺さましたけれど、小用こように行いつて来きてまた寝ねた。

『斯様こんな時ときに安心あんしんしてよく寝ねな！ 私わたしはお前まへを休やすます爲ために呼よんだんだよ。』

『嬉しいわ！ あなたの深切しんせつは忘わすれないわ。』

それから本當ほんたうに起おきたのは、十時じゅうじを少し過すぎてゐた。朝飯あさめしを済すましてからもそのまゝ其處そこに根ねが生はえたやうに向むかひ合あつて飽あきもせず話はなし耽ふけつてゐた。先せん達だつて中續ちゆうつづけて瑠璃色るりいろに晴はれ渡わたつてゐた空そらが今日は濕しめつぽく曇くもつた。

『散歩さんぽに出でたいのだが、曇くもつてゝ厭いやだなあ。』

眞島まじまは怠屈たいくつして立つて障子しやうじを明あけた。泉水せんすいを取卷とりまいた十坪じゅうへいばかりの庭樹にんぎすの彼方かたには枝振えだふりりの面白おもしろい松まつの老樹おおいきの密生みつせいした形かたちの好いい山やまが、毎時いっぴき見みても眼めを覺さますやうに聳そつてゐる。

『散歩に出なくつても好いわ。此處にかうしてゐてもいゝ。』と、いつてゐたが、また、

『出て見ませうか。』と女が調子づいたので起ち上つた。

『私、このまゝで行くわ。』女は派手な貸浴衣の上に被つてゐた宿の襦袢を脱いで、その上に縮緬の黒羽織を着ようとした。

『そんな風をして歩くのはよしてくれ。矢張り着物を着て行け。』

『帯をするのが大變なんだから。あなた締めるのを手傳つてくれて。』

『手傳つてやるさ。』

『さう。ぢやさうする。』

やがて折角出掛けたと思ふと、すぐ雨が降つて來た。

『こりやいけない。もう引返へさう。さうして自家で粟を煮て食べようよ。』

『あゝ、さうしませう。それがいゝわ。』

八百屋から粟を取つて來さして、自分達で煮た。女は話しながら、それを剥いては男の口を持つて行つてやつた。男は女の望み通りに『博多小女郎浪枕』を讀んで、六ヶ敷い處を説いて聽かした。

『三月に延次郎の毛剃を見たわ。よかつたわ。……宗七が死んで小女郎はどうするの？ もう一生何處へも嫁に行かないの？』

『さあ、どうするか。小女郎はさうするんだらう。お前、この後私と一緒になつて、もし私が早く死んだらどうする？』

『私、もう一生に定つた夫は一人で澤山だわ。』

『私が生きてゐる間だけさうなのだらう。』

『それより、あなた、あの單衣をどうして？』

『あのまゝさ。』

『今此處に持つて來てゐるの？』

眞島が、この夏東京に歸つた時、自分のと女のを二反買つて來た縮の浴衣を大阪に着いた晩にあなたのも私持つて行つて置いて暇の自分に縫つて置いて上げませうといつたのを、いゝからといつて自分のだけは、反のまゝ彼れの體と一緒に方々持つて廻つてゐたのである。

『出してお見せなさい。』

眞島は押し入れの荷物の中から、それを取出した。

『いゝ柄だわねえ。私此處にゐる間に縫つて置きませうか。こゝの綴ち糸だけ切つてもよくつて。』

女は、反を長く解いて自分の腕に掛けて首を傾けて見廻したりしてゐた。

『此處ちや縫ふ間はないよ。どうせ裁縫の達者な人だから。……お前と東京に歸るまでそのまゝにして置かう。いくら遅くなつても來年の夏の間には六百圓を拵へるよ。』

『本當にさうして頂戴。私も精を出して働ぐわ。その時分には私の方が四百圓ぐらゐにはなるから。』

千代奴の身の代金は千圓であつた。

十疊だの十二疊だの、その他小間を入れて七間も八間もある鷹揚な建築の別館には、二階の六疊に一人滞在の客がゐるきりで、他に客はなかつた。眞島の部屋は、階下のずつと奥まつた八疊であつた。雨はざんく音を立て、降り續いてゐる。坐つたまゝ障子を一枚押すと、高く軒端まで達いた向の山の緑を背景にして雨が降つてゐるのが美しく眼に入る。銀灰色の空から何處ともなく落ちて來る雨がその山の頂點まで達くと、始めて白い細絲を長く引いてゐるのが見分けられる。

『あれ、あの雨を御覧。綺麗だなあ。山の青い處へ降つてゐるから白く見える。』

眞島は一心に雨の色に見惚れた。

『いゝわねえ。かうしてゐて雨の音を聴いてみると、安心な心持ちになつて来てよ。』

晩食は牛肉を誂へて置いて、相合傘を翳して温泉に行つた。眞島は昨夜の寝不足やら運動不足の上に過度の飲食で終日氣怠い食もたれの心持ちがしてゐたのが、温泉に漬つて来ると、倦み疲れてゐた頭腦が、全然入れ換へたやうに軽くなつて、元氣づいた。

味の良いい神戸の牛肉の夕飯も濟んだ。

『お腹がくちくなつた。何か聲を出して唄つて見よう。』

眞島は、さういつて坐り直つて、聞き覚えの唄の節やら淨瑠璃の眞似をした。旅館に三味線があるのだけれど、わざと三味線などを弾かなかつた。

『私、一つ踊つて見ようか。』女はさういつて立ち上つて「夕ぐれ」と「秋の夜」を祕密のやうにして踊つた。

『私、「時雨西行」が好きだ。お前の昨夕の身の上話を聴いて一層それが懐しくなつた。ねえ「アラうらやまし、わが身のうへ。ちよはよさへもしらなみの。よするきしべのかはふねを。とめてあふせの浪枕。世にもはかなき流れの身……』

眞島は、文句は覚えてゐるばかり、習つた節ではないので、それが長唄の眞似にならうとも淨瑠璃の調子が混じらうとも構はなかつた。唯、自分で、その文章の前後に就いて感ずる心持ちを氣に入るやうな聲音に出して物悲しさうな調子で唄つた。

『ねえ、お前にもお母さんやお父さんがあつても、無いも同然なんだらう。私はそのお前の「父母さへも白波の、世にもはかなき流れの身」が可哀相だ。東

京から遠く大阪へ流れて来て矢張り遊女になつてゐるのだ。』さう言つては、同じ處を幾度も繰返へした。

『私はまた西行法師が好きだ。』ゆくへさだめぬ雲水のく。月もろともに西へゆく。さいぎやう法師は家を出て、一所不住の法の身に、吉野の花や、さらしなの月もこゝろのまにく三十一字の歌修行』……』

眞島は、とうく立つて行つて、荷物の中から旅にも忘れず携へて来てゐる長唄の稽古本を取り出した。さうして處々を意の赴くまゝに聲を上げて唄つた。

女は、その物悲しげな聲色に眼を潤まして聽いてゐた。

大正五年七月十一日印刷
大正五年七月十五日發行

(定價金四拾錢)

葛城太夫

著 者

近 松 秋 江

發 行 者

佐 藤 義 亮

發 行 所

東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社
電話(番町)二、二二三番
振替(東京)一、七四二番

印 刷 所

東京市神田區宮本町五
電話下谷 五九〇八

新潮社印刷部
(印刷者) 高橋治一

京阪を題材とせる傑作

■舞鶴心中 近松秋江氏作 定價四十六錢 送料八錢

■鴨川情話 長田幹彦氏作 定價八十六錢 送料八錢

■小夜ちどり 長田幹彦氏作 定價四十六錢 送料八錢

■舞妓姿 長田幹彦氏作 定價四十六錢 送料八錢

■父の婚禮 上司小劍氏作 定價八十五錢 送料八錢

■祇園歌集 吉井勇氏作 定價五十五錢 送料八錢

□ 新 潮 社 出 版 □

274
260

終



新潮社